

なぜ、刃傷事件は起きたのか、その他

目次

なぜ、刃傷事件は起きたのか

- 一、 一般的な問題
- 二、 個人差の問題
- 三、 魔がさすとは
- 四、 熟考（核心部分）
- 五、 新年の恒例行事
- 六、 梶川氏日記
- 七、 書き下し文 其の一
- 八、 書き下し文 其の二
- 九、 書き下し文 其の三
- 十、 問題点 一
- 十一、 問題点 二
- 十二、 栗崎道有どうう記録
- 十三、 多門伝八郎おかど覚書
- 十四、 辞世の句
- 十五、 いじめとは
- 十六、 結び
- 十七、 浅野内匠頭たくみのかみ家来口上

精神の自立について

- 一、 民主主義とは
- 二、 精神の自立とは
- 三、 芭蕉、西行、その他

徒然草の「最終段」

- 一、 徒然草
- 二、 晩年の兼好
- 三、 八歳の時の「想い出」
- 四、 最終結論

※ 参考文献

なぜ、刃傷事件は起きたのか

なぜ、刃傷事件は起きたのか

例えば、毎年、十二月になると、最近は、ともかく、昔はよくテレビなどでも赤穂浪士の話題を取り上げることが多かったかと思うが、それでは、なぜ、長い間、多くの人々を惹きつける魅力を持っていたのだろうか？ 考えてみれば、不思議なことであるが、その不思議さは、恐らく、事件当初からあったに違いない。……

さて、刃傷事件は、朝十一時頃に起き、その後、浅野内匠頭は、田村家に預けられ、そして、その日の午後六時過ぎには、すでに切腹をしているわけである。その間、切腹をする前に、家来に手紙を遣わしたいと望んだが、許されず、そこで口上にて、「……このことはかねてより知らせようと思っていたが、今日までやむをえず知らせられなかった。不審に思っているだろう」という伝言を家中に残したことと、また、真偽のほどはよくは知らないが、有名な「……風さそふ 花よりもなほ我はまた 春の名残をいかにとかせん」という辞世の句を残して、この世を去ってしまうわけである。それでは、なぜ、刃傷事件は起きたのか？ この問題から考えてみたいと思う。

むろん、この問題は、極めて微妙な問題を孕んでいるものであるが、しかし、その極めて「微妙な問題」こそ、この事件のまさに「急所（核心部分）」にあたるわけである。そして、その「急所（核心部分）」をできるだけわが身にかけて、実感として感じ取るためには、浅野内匠頭の「頭の中」（或いは「心の中」）をできるだけ徹底的に、かつ忠実に生きてみることに、何よりも大事なことはあるが、それは、極めて難しい作業になるとともに、ほとんど不可能に近いものになるのだろうか。それゆえ、ここでは、もっと一般的な問題として考えてみたいと思う。

一、一般的な問題

例えば、浅野内匠頭は、最初から「刃傷事件」を起こそうとしていたのだろうか。もちろん、そうではないだろう。もし、最初から計画的に行なおうとしていたら、もっと「致命的な打撃」を与えることができただかも知れない。それゆえ、浅野内匠頭は、上野介とのあつれきを感じながらも、できるだけ問題を起さず、すべてが無事に終わることを願っていたに違いない。それでは、浅野内匠頭は、上野介との間のあつれきをどの程度感じていたのだろうか？ つまり、それは、もう耐えがたいほど感じていたのか、それとも、かなり耐えがたいものではあるが、まだ何とか耐えられるものと感じていたのか。これは、極めて大事なところであり、前者の「もう耐えがたいほど感じていた」とすれば、恐らく、浅野内匠頭の「頭の中」（或いは「心の中」）では、いわゆる「殺意」というものが芽生えていたかも知れない。つまり、「心の中」では、何度か「殺意」が現われたり消えたりしていたが、それを自分の「理性」で何とか抑え込んでいたということである。しかし、もう一度、「何らかの大きなあつれき」が生じた場合には、いわゆる「理性」で何とか抑え込んでいた「殺意」が、一気に表面化する危険性を孕んでいるものである。

一方、もし、後者の「かなり耐えがたいものではあるが、まだ何とか耐えられるものと感じていた」とすれば、たとえ何度か「殺意」が現われたり消えたりしていたとしても、それは、まだそれほど深刻のものではなかったかも知れない。もちろん、そのどちらであ

るかは分からないが、そのどちらであれ、上野介との間に、何度かの「あつれき」があったことは間違いないだろう。というのも、もし、一度の「あつれき」もなく、松の廊下が最初の「あつれき」で、一気に「刃傷沙汰」になるということは、一般に考えにくい。なぜなら、浅野内匠頭自身は、できるだけ問題を起こさず、すべてが無事に終わることをひたすら願っていたに違いないからである。それを、ただ一度だけの「あつれき」で、一気にすべてを失うような行動に出ることは、一般に考えにくいからである。つまり、その時が初めてであれば、まだ何とか我慢できるものだからである。また、真偽のほどはよく知らないが、上野介に斬りつけた時に、「この間の遺恨覚えたるか！」という言葉が発したと言われるが、もし、それが本当であれば、それは、何度かの「あつれき」があつて、その「積もりに積もった思い」が、一気に「表面化した言葉」になるのだろう。それに加えて、映画やドラマでは、最初、眉間に斬りつけ、次に、逃げる上野介の背中を斬りつけ、その後、そばにいた留守居番の梶川与惣兵衛に止められている状態を振り切つても、上野介に斬りつけようとしているのを見ると、それは、やはり、それなりに「積もりに積もった思い」が一気に爆発したものとみるのが、一般的には妥当な見方になるのだろう。(この問題は、再度、厳密に考察したいと思う。)

二、個人差の問題

ただ、ここで留意しなければならないことは、ある人にとっては、それほどでもないことが、ある人にとっては、もう耐えがたいほどの苦痛になる場合があるという、いわゆる「個人差」の問題である。つまり、上野介にしてみれば、相手からいきなり斬りつけられるほどの悪いことは、自分は、何もしていないという思いがあつたかも知れない。これは、極めて「大事な問題」であり、例えば、「いじめ」などの問題でも、いじめをする側は、比較的軽い気持ちで、いわば面白半分で行なっているような場合が多いわけだが、一方、いじめられる側は、それを極めて深刻に受けとめてしまう場合が多いわけである。つまり、する側は、気持ちの上で、相手より優位に立っているので、比較的軽い気持ちでいられるが、される側は、どうしても屈辱的に受けとめて、相手を憎んだり、また、気持ちも深く滅入ってしまうものである。むしろ、その「受けとめ方」にも、当然、「個人差」があり、例えば、ある人は、他人から悪口を言われた時に、それを比較的軽く受け流せる人もあれば、ある人は、極めて深刻に受けとめてしまう場合もあるとともに、たとえ同じ人間であっても、その人に「心の余裕」がある時には、それをもろに受けとめてしまい、一気に激怒してしまう場合も多いわけである。それを第三者から見れば、なぜ、それくらいのことか、あれほど荒れ狂うのかと、不思議に思うかも知れないが、しかし、それは、その時だけのことではなく、それまでに「積もりに積もったもの」があつて、それに新たに何か加わった時に、一気に切れてしまう場合が多いということである。

それでは、なぜ、この問題に執拗にこだわるのかと言えば、それには、次のような理由があるからである。つまり、われわれ人間の「魂」というのは、プラトン風に言えば、「欲望的部分」と「気概(激情)的部分」それに「理知的部分」とに分かれるわけだが、浅野内匠頭の「理知的部分」では、できるだけ何の問題も起こさず、すべてが無事に終わるこ

とをひたすら願っていたにもかかわらず、もう一方の「気概（激情）的部分」に振りまわされてしまい、結果として、刃傷事件を起こしてしまうわけである。そして、この事件をわれわれ「第三者」から見れば、なぜ、もつと我慢ができなかったのか、ということになるのだろう。確かに、その通りであり、あの時、我慢ができていさえすれば、すべてはうまく行ったに違いない。そして、それを誰よりも骨身に染みて実感したのは、まさに「浅野内匠頭自身」であつたであらう。

事件後、浅野内匠頭たくみのかみは、何度も何度も事件のことを「心のスクリーン」に思い出している、いわゆる「自問自答」を繰り返したに違いない。そして、あの時、もう少し我慢ができていさえすれば、すべてはうまく行ったに違いないという思いは、当然、生じてきたに違いない。そして、自分は、何て取り返しをつかないことをしてしまったのか！ ああ、どうしてこんなことになってしまったのか？ という思いに襲われていたことも間違いないことだろう。だが、そう思いながらも、もう一方では、あの時、そうせざるを得なかった自分の思いというものもあつて、そういう「様々な思い」が、次から次へと現われては消えて行つたであらう。そして、自分のこともあるが、それと同時に、家族や数多くの家来のことを思い、すまないという思いに襲われていたかも知れない。つまり、自分は、殿中で、いわゆる「刃傷事件」を起こしてしまつたのだから、何らかの罰を受けるのは、仕方がないとしても、何の罪もない家族や数多くの家来たちまで事件に巻き込み、大変な迷惑をかけることになつてしまつたことに対しては、やはり「すまない」という思いに襲われていたことも間違いないことだろう。——ここは、意外と忘れられがちなどころであるが、自分としては、あの時、もう少し我慢ができていたらという思いと、一方、そうせずにはいられなかつた自分の思いというものもあつて、今となつては、もうどうしようもないことではあるが、ただ、そのために、何の罪もない家族や数多くの家来たちまで巻き込んでしまつたことは、やはり辛いことであつたであらう。

例えば、よく「カッとなつて」、人を殴つたり、殺してしまつた人が、後になつて、その時のことをあれこれ思い出した時に、一体、どういう思いに襲われるのだろうか？ もちろん、それは、ケース・バイ・ケースで各人それぞれみな違つてくるだろうが、一方、何か共通した「心の状態」というのも、ある程度、あるのかも知れない。特に、その瞬間の「自分の心理」をできるだけ忠実に思い出そうとしても、なぜかそのもつとも肝心なところがよく思い出せないというようなことも、よくあることではないかと思う。つまり、最も肝心なところが、最も「暗くて深い淵かみ」になつていてということである。それゆえ、他人からどうしてこんなことをしてしまったのか！ と問われた時に、もちろん、実にいろいろなきが思い出されて来るだろうが、しかし、最も肝心な、その瞬間の「自分の心の状態」と、なぜその瞬間、「そういう行為」に移つてしまつたのか、その最も肝心なところが、どうしてもうまく思い出せず、敢えて言えば、その瞬間、まさに「魔がさした」としか、言いようのないものかも知れない。そして、ふと我に返れば、なぜ、自分は、こんなことをしてしまったのか！ と、誰よりもその人自身がいちばん驚いていることも多いのだろう。そして、自分が悪いんじゃない、相手が悪いんだと、叫ぶような場合もあれば、自分は、何て愚かな、何て取り返しをつかないことをしてしまったのか！ ああ、一体、どうしてこんなことになつてしまったのか！ と、頭を抱えてしまうような場合も多いのだろう。

三、魔がさすとは

それでは、その瞬間、「魔がさす」とは、一体、どういうことなのだろうか？ もちろん、それを客観的に説明をすれば、われわれ人間というのは、「知性や理性」に強く支配されていて、様々な「欲望や感情」などは、それなりにコントロールされているわけであるが、何か問題を起こすその瞬間は、その人の「知性や理性」などの支配よりも、その時の「欲望や感情」のほうが勝ってしまうからである。それでは、なぜ、「知性や理性」は、様々な「欲望や感情」などに負けてしまうのかと言えば、それは、われわれ人間の「知性や理性」というのは、動物からわれわれ人間へと進化をして来る過程で誕生したものであるが、もう一方の「欲望や感情」というのは、ほかの動物たちにも共通した「より根源的なもの」だからである。それゆえ、われわれ人間の「知性や理性」が、いわゆる「欲望や感情」などに負けてしまうのも、ある程度は、仕方がないことかも知れない。そして、その瞬間、「魔がさす」とは、その人の「知性や理性」の支配よりも、その時の「欲望や感情」のほうが勝ってしまうことである。つまり、浅野内匠頭の「理性的部分」（知性や理性）は、できるだけ問題を起こさず、すべてが無事に終わることをひたすら願っていたにもかかわらず、もう一方の「気概（激情）的部分」に振りまわされてしまい、結果として、刃傷事件を起こしてしまっただけである。それでは、なぜ、浅野内匠頭は、いわゆる「気概（激情）的部分」に振りまわされてしまったのかと言えば、それは、意外にお互いの「相性の悪さ」みたいなものもあったのかも知れない。そして、実際に、何度か会って話をする機会もあったかと思うが、その時にも、お互いの「考えや感情」などが想うようにしっくりとかみ合わず、そのために、軋みが生じる（それがまさにあつれき）であるが、そのようなことが何度かあったのかも知れない。そして、そのような上野介との何度かの「あつれき」のなかで、浅野内匠頭は、被害者意識を強め、自分は、何か不当な扱いを受けているとか、あるいはこのままでは、武士（或いは城主）としての「面目が立たない」とか、その他、それが、いったいどういうものであったかは、未だはつきりしない部分であるが、ただ、一般に考えられている「乱心」説のような、つまり、たとえ、いわゆる「勅使供応役」という重責に強く押しつぶされ、心身ともに非常に疲労困憊し、そのために精神的にも自分をコントロールできないほど不安定な状態だったとしても、それは、一般に、「心神耗弱状態」と呼ばれるものだが、たとえ仮にそのような「精神状態」だったとしても、それだけでいきなり刀を抜いて、相手に斬りつけるという「刃傷事件」は、起こらないのであり、それに加えて、上野介との間に、何らかの「あつれき」が生じ、生じた時に、浅野内匠頭の「心の中」では、一瞬、「許せない」という思いが生じて来たに違いない。そして、この「許せない」という思いこそは、まさに「急所（核心部分）」になるかと思う。なぜなら、もし「許せる」ならば、何も「刃傷事件」など起こす必要がないからである。それゆえ、浅野内匠頭の「心の中」に、一瞬、「許せない！」という思いが生じて来たに違いなく、そして、その瞬間、「許せない」という思いと同時に、非常に激しい怒りが生じて来て、そのために、浅野内匠頭の「理性的部分」（知性や理性）では、できるだけ問題も起こさず、すべてが無事に終わることをひたすら願っていたにもかかわらず、そのような思いは、一瞬にして、どこかに

吹き飛んでしまい、彼の「心の中」では、まさに「許せない」という想いと、非常に激しい怒りとに支配されて、一気に「刃傷沙汰」という行為に移ってしまったということである。そうでなければ、いきなり刀を抜いて、相手に直接、斬りつけるという行為は、よほどの理由がない限り、なかなかできないことだろうと思うからである。

四、熟考（核心部分）

さらに、もう少し詳しく考えてみたいと思うが、いわゆる「刃傷事件」があった日は、江戸城内での「公式行事」の「最後の日」であったが、これは、一体、何を意味するのだろうか？ つまり、この日さえ、何も問題を起さなければ、すべては無事に終わっていった可能性は極めて高いのである。それなのに、なぜ、この日に限ってと疑問が生じて来るかと思うが、それは恐らく、この日までは何とか理性で「自分の感情」を押さえ込んでいたということであり、それでは、なぜ、「この日」は、それができ得なかったのか？ それは、何かが新たに加わったからなのか？ それともほかに理由があったのだろうか？

まず、考えてみなければならぬことは、そもそも「浅野内匠頭」は、いわゆる「吉良上野介」を本当に殺そうとしたのだろうか？ この「問い」は、極めて大事な「急所」であり、つまり、前々から計画を立てて、相手を確実に「殺そう」と心の底からそう願っていたならば、それは、相手に「斬りつける」のではなく、むしろ相手をひと思いに「突き殺す」べきなのである。これならば、相手を確実に殺すことができ得る。ところが、浅野内匠頭は、なぜかそれを行っていない。これは、一体、何を意味するのだろうか？ 考えられることの一つは、あの有名な「刃傷事件」というのは、前々から「計画された犯行」ではなかったということなのか？ それとも、相手をいきなり不意打ちのように「刺し殺す」のは、武士としてまさに「卑怯」という意味から、いきなり「刺し殺す」のではなく、大声を発してから、相手に切り付けることで、まわりの他人たち（或いは「相手」）から「卑怯」だと非難されることを避けたのか？ それとも、何らかのことで、一瞬、カッとなって、文字通り、まさに前後の見境もなく一気に斬り付けてしまったのか？ これらのどれかと思うが、たとえそれが何であれ、いわゆる「この間の遺恨覚えたるか！」と、この言葉の「真偽の問題」も未だ残されているが、ここでは措くとして、大声を発して、襲いかかっているのである。しかも、何よりも大事なことは、まさに「この間の遺恨」（それは、具体的には「三月一日〜三月十三日まで」に生じた遺恨）であり、それゆえ、たった一度だけの「遺恨」でもなければ、今日の「遺恨」でもないのである。もし、たった一度だけの「遺恨」であれば、あの時の「遺恨」となるはずであり、また、若しも今日の「遺恨」も加わったならば、それこそ、まさに「最後の一押し」となったものになるのだろう。つまり、それは何であれ、このまま何らかの「屈辱を受けた」ままでは、まさに「武士」（或いは「城主」としての「面目が立たない」ということである。つまり、武士たるものは、何らかの「侮辱」を受けたならば、その「侮辱」を晴らさなければ、「武士」（或いは「城主」としての「面目が立たない」のである。それゆえ、何とか「一撃」を加えて、まさに「一矢報い」たかった。このまま「赤穂」に帰ったのでは、「武士」（或いは「城主」としてやっていけないという想いがあったのかも知れない。そして、それができ得るのは、今、まさに吉良上野介が現に目の前に存在する、まさに「今、この瞬間しかない」と、一

瞬、そういう「想い」に襲われたのかも知れない。そうだとすれば、それは、まさに「最後の一押し」ともなり得るものである。ただ、ここで何よりも大事なことは、たった一つの理由だけではなく、むしろ実に様々なものが複合的に積み重なった「心的状態」であったのだろう。あとは、まさに「最後の一押し」だけである。それは、意外に何か「確たる理由」でなくてもよかったのかも知れない。ここまで追い込まれた「心的状態」であれば、他人から見れば、何でそれくらいのことだと思えるようなことでも、まさに「最後の一步」を踏み出してしまいう可能性は十分にあり得るのである。そして、いわゆる「この間の遺恨覚えたるか！」という言葉を発して、吉良上野介に斬りつけたが、この間の遺恨を晴らすだけの十分な「手応え」がなかったために、二の手の斬りつけを行なったが、これも十分な「手応え」とはならず、さらにと空斬りをするところを、たまたまそばにいた留守居番の梶川与惣兵衛に止められてしまったということである。むろん、この「刃傷事件」は、決して「計画的なもの」ではなかったと思うが、しかし、潜在的にはいつそういうことが起きてもおかしくないような「心的状態」にはあったのだろう。

五、新年の恒例行事

さて、毎年、新年になると、江戸の「幕府」からは、高家を「名代」（「將軍の代理」として京都に遣わし、その京都の「朝廷」（つまり「天皇と上皇」）に対して、まさに「新年祝賀の奏上」（それは「年賀の挨拶」）を行なうことになっていた。そのため、高家筆頭の吉良上野介は、まさに京都へと遣わされていたのである。一方、それに対して、京都の「朝廷」（つまり「天皇と上皇」）からは、いわゆる「勅答の使者」（つまり「天皇の使者は、勅使、上皇の使者は、院使」）を、三月に、江戸の「幕府」の方へと遣わすことになっていた。それが、まさに「毎年の恒例の行事」になっていたのである。

そして、「天皇の使者」である「勅使」、その「勅使の接待役」が、まさに「勅使饗応役」であり、その「勅使饗応役」を、今年も、播磨赤穂藩主浅野内匠頭長矩（五万石）が担当し、一方、「上皇の使者」である「院使」、その「院使の接待役」が、まさに「院使饗応役」であり、その「院使饗応役」を、今年も、伊予吉田藩主伊達左京亮村豊（三万石）が担当し、その「饗応」（つまり「食事や接待の仕方」など）の「指南役」として、高家筆頭の「吉良上野介義央」（四千二百石）が担当することになっていたが、彼（吉良上野介）は、一月十一日に江戸を立ち、それから、二月一日には用事を済ませて京都を立つ。そして、その京都からはるばる江戸へと戻って来るのは、二月二十九日のことである。

さて、時は「元禄十四年」（一七〇一年）の三月十四日の午前十一時過ぎ、天下太平の世の中に、青天の霹靂の如く、あまりにも有名な『元禄赤穂事件』（その最初の発端である「松の廊下刃傷事件」）が突発的に起こる。その「経緯」は、次のようなものである。

まず、「朝廷の使者一行」は、三月十一日には、江戸に到着している。そして、その「朝廷の使者一行」（「勅使二人と院使一人」の一行）は、「伝奏屋敷」という所に宿泊をして、そこで、「勅使饗応役」の浅野内匠頭や「院使饗応役」の伊達左京亮などから、それぞれ接待を受けることになる。そして、翌十二日は、登城して、將軍綱吉に「拜謁」をし、まさに「勅旨」（天皇のお言葉）や「院旨」（上皇のお言葉）などを伝えている。そして、翌十三日は、將軍が殿中で催した「猿楽能」などを楽しんでいる。そして、事件のあった

十四日は、將軍綱吉が「勅使・院使」に「奉答する日」（それは先の「勅旨・院旨」に対して返事を奏上すること）になっていて、これを無事に終えれば、江戸城内での「公式行事」は、ほぼこの日で終わり、そして、翌十五日は、増上寺等を参拝をして、京都へ帰る予定であったのである。しかも、十四日の日は、すでに「朝廷の使者」（勅使二人と院使一人）は、登城して、「下之間」（原文では「御休憩之間」という処に控えていて、まさに「御白書院」での「奉答の儀」（それは先の「勅旨・院旨」に対して返事を奏上すること）を待つばかりになっていたのであり、そこに突然、「事件」（つまり「松の廊下刃傷事件」）が突発的に発生したため、どうしたものかということになるが、結局、場所を「御白書院」から「御黒書院」へと移して、そこで、そのまま「奉答の儀」は行なわれ、そして、無事に終えることになったのである。

六、梶川氏日記

それでは、なぜ、刃傷事件は起きたのか？ それは、次のような「推移」である。今度は、留守居番の梶川与惣兵衛が書いた『梶川氏日記』の資料に基づいて、より詳しく考えてみたいと思うが、それは、次のような内容である。

* *
まず、留守居番の梶川は、「……十四日、今朝五ツ時、例の通登城、御広敷へ参る」とある。つまり、「十四日、朝八時頃、いつものように登城して、広敷の方へ行つた」のである。（中略）、そして、「……自分部屋へ参り刀を差置、御留守居衆の部屋へ参り候へば、主計殿御申す」には、「先刻吉良殿より『今日の御使の刻限早く相成候』旨申し参り候」旨被申候故、「委細承候」と申て、とある。つまり、「……自分部屋に参り刀を置いて、留守居衆の部屋へ行つてみると、主計殿が申すには、先刻、吉良殿から、『今日の御使の刻限（時間）が早く相成候と申していた』ということで、では、その子細を承ろう」として、「……夫より中の間へ参り候処、多門伝八が被居候故、公家衆を尋候へども、居られ申さず候」。「然ば殿上の間に可被居候はんや」と申候処、「最早公家衆にはご休憩の間へ被参候」に付き、「左候はご大廊下には高家衆被居可申候」と申候へば、「如何可有之哉」と被申候間」とある。この部分は、「……それより中の間へと参ると、多門伝八が居られたので、公家衆のことを尋ねてみたが、どこにも居られなかった。然れば、殿上の間に居られるのかと申したところ、『最早公家衆は、ご休憩の間へ参られてはいる』と言うので、『それならば、大廊下には高家衆が居られるでしょう』と申せば、『どうでしょうか』と申された」ので、そこで、「……然らば大廊下へ参り見可申」と申し捨て、つまず、「……それでは、大廊下の方に行つて、探して見よう」と申して、「……大広間の後通りを参り候処、坊主兩人参り候。一人は大広間の御縁類杉戸の内へ入り申し候。一人は我等後の方へ参り申し候」とある。つまり、「……（それでは、大廊下の方に行つて、探して見よう）と申して、大広間の後通りに来たところ、坊主が二人やってきて、一人は、大広間の御縁類杉戸の内へ入り、そして、もう一人は、自分の後の方へ行つた」ということである。ここまでは、吉良殿を探して、大広間の後通りまで来たという経緯である。（つまり、留守居番の梶川与惣兵衛という人は、吉良殿の言伝では、「今日の御使の刻限（時間）が早く相成候と申していた」ということで、それでは、その子細を承ろうとして、吉良殿

をあちこち探しまわって、大広間の後通りまで来たという経緯なのである。)

それでは、その次の『梶川氏日記』の「書き下し文」は、次のようなものである。

七、書き下し文 其の一

さて大廊下御縁の方、角柱の辺より見やり候へば、大広間の方御障子際に内匠・左京
両人居られ、夫より御白書院の御杉戸の間二三間を置き候て、高家衆大勢居られ候体見へ
候間、右の坊主に「吉良殿を呼びくれ候様」申し候へば、参り候て即(すなはち)立帰り、
「吉良殿には只今御老中方より御用の儀有此候て参られ候」由申し聞き候。「さ候はゞ内匠
殿を呼び参り候やう」申し遣し候処、即(すなはち)、内匠殿参られ候故、「拙者の儀今
日伝奏衆へ御台様よりの御使を相勤め候間、諸事宜しきやう頼み入る」由申し候。内匠殿
「心得候」とて本座へ帰られ候。

其後御白書院の方を見候へば、吉良殿御白書院の方より来り申され候故、又坊主呼びに
遣し、其の段吉良殿へ申し候へば、承知の由にて此方へ参られ候間、拙者大広間の方御休
息の間(下之間)の障子明て有之、夫より大広間の方へ出て候て、角柱より六、七間も可有此
処に雙方より出会ひ、互いに立ち居て候て、今日御使の刻限早く相成り候儀を一言二言申
し候処、誰やらん吉良殿の後より「此間の遺恨覺えたるか」と聲を掛け切り付け申し候。
(其の太刀音は強く聞え候へども、後に承り候へば、存じの外、切れ申さず、浅手にて有此
候。我等も驚き見候へば、御馳走人の浅野内匠殿なり。(本文)

さて、「大廊下」(それは畳敷きの「松の廊下」の縁側の方、角柱の辺りから、(遠く
離れた)御白書院の方を見渡して見ると、まず、手前の「大広間の方の障子際」に、まさ
に「勅使饗応役」の浅野内匠頭と「院使饗応役」の伊達左京の両人が居られ、一方、(遠
く離れた)御白書院の杉戸から二、三間(一間は約一・八メートル)離れて、高家衆が大勢居ら
れるように見えたので、そばにいた坊主に「吉良殿をお呼びして来るように」と申すと、
行つてすぐに帰り、「吉良殿はただいま御老中の方にご用がありて御白書院に参つており
ます」と申し聞き、「それなら、内匠殿を呼んで来るよう」申し遣わした処、すぐに内匠
殿参つたので、「拙者の儀」(自分)は、今日、伝奏衆(「勅使・院使」等)への御台様(将
軍のお后様)の「御使」を相勤めますので、その間の「諸事」は、宜しくお願い致しま
すと申すと、内匠殿は、「承知致しました」と、本座(元いた本来の場所)へと帰られた。

その後、御白書院の方を見ると、吉良殿が御白書院の方より来て、(途中、高家衆に何
か申している)ので、また、坊主に吉良殿を呼んで来るよう遣わし、その事を吉良殿へ申
すと、了解した由でこちらの方へやって来るので、拙者(自分)は、大広間の方の「御休
息の間」(勅使・院使が居る「下之間」)の障子が開いていたので、(それゆえ、「松の廊
下」を通るのを避けて)、夫より大広間の方へ出て(それは「大廊下の縁側の方を通過
松の廊下に入るといふ」「一つの解釈」が生じる所以)、角柱より六、七間(約十二段)あ
るところで双方が出会い、お互い立った状態で、今日の(自分)の御台様の「お使い」の
儀の時刻が早くなった事について一言二言話をしている所に、誰かしら吉良殿の後ろから、
「この間の遺恨覺えたるか!」と声をかけて切り付けたのである。(その太刀の音は強く

聞こえたけれども、あとで聞いてみると、意外と切れず、浅い傷であったという。わたしも驚いて見ると、それは、御馳走人の浅野内匠頭であつたということである。

八、書き下し文 其の二

上野介殿、「これは」とて、後ろの方へ振り向き申され候処を又切り付けられ候故、我等の方へ向きて逃げんとせられし処を、又、二太刀ほど切られ申し候、上野介殿其俣うつ向に倒れ申され候。其の時に我等内匠頭殿へ飛びかかり申し候。(吉良殿倒れ候と大かたとたんにて、間合いは二足か三足程のことにて組み付き候様に覺え申し候)。右の節、我等片手は内匠殿小き刀の鏢に當り候故、それともに押し付けすくめ申し候。其の内に近所に居合はせ申されし高家衆、并に内匠殿同役左京殿などかけ付けられ、其外坊主共も見及び候処に居合はせ候者ども、追々かけ来り取りおさへ申し候。(本文)

*

*

上野介殿は、「これは」と言つて、後ろの方を振り向かれたところを、また、(眉間を)切り付けられたために、わたしの方へ向きて逃げようとするところを、また、太刀で二度ほど切られました。上野介殿は、そのままうつ向きに倒れてしまい、その時に、私は、内匠殿へ飛びかかりました。(吉良殿が倒れたということだ殆ど大慌てで、間合いは二、三歩ほどでしたが、組み付けたように覚えております)。――右の折、私の片手は、内匠殿の小き刀の鏢に当たつたので、それともに(畳に)押し付けて動けないようにしたのです。そうする内に、近くにいた高家衆、ならびに内匠殿と同役の左京殿など駆けつけ、そのほか坊主とそこに見及ぶ所に居合させた者ども、追い追いかたり取り押さえました。

九、書き下し文 其の三

さて最前倒れ申し候上野殿を尋ね候へども一向に見え申さず、右の騒ぎの中に、何人か介抱いたし引退き候や、其の近き所には見え申さず候。後に承り候へば、豊前殿・下総殿など駆け付けて上野介殿を引き起し候へども、老人の手負ひ故、一向正気もこれ無く候へば、兩人して引き抱へ、御医者の間の方へ連れ行き申され候由に御坐候。夫より内匠殿をば、大廣間の後の方へ、何れも大勢にて取り囲み参り申し候。其の節、内匠殿申され候は「上野介の事、此の間中、意趣有此候故、殿中と申し、今日の事かたがた恐れ入り候へども、是非に及び申さず、打ち果し候」由の事を、大廣間より柳の間溜りの御廊下杉戸の外迄の内に、幾度も繰返し繰返し申され候、其の節の事にて、せき申され候故、殊の外大音にてこれ有り候。

高家衆を始め取り囲み参り候衆の中「最早事済み候間、だまり申され候へ。あまり高聲にて如何」と申され候へば、其の後は申されず候。

此度の事ども後々にて存じ出し候に、内匠殿心中察し入り候、吉良殿を討ち留め申されず候事、嗚々無念にありしならんと存じ候。誠に不慮の急変故、前後の思慮にも及ばず、右の如く取り扱ひ候事は非なく候。去ながら是等の儀は一己の事にて、朋友への義のみなり。上へ対し候ては、かやうの議論に及ばぬは勿論なれども、老婆心ながら彼是と存じめぐらし候事も多く候。(本文)

さて、最前、倒れた上野殿を探しても、一向にその姿が見えず、その騒ぎの時に、誰かが介護して連れ去ったのか、その近辺には見えませんでした。あとで聞いてみると、豊前殿・下総殿など駆け付けて、上野介殿を引起こしたが、老人の手負いのため、一向に正気（確かな意識）もなく、両人して引き抱へ、御医者の方へ連れて行った由にございます。それより内匠殿をば、大広間の後ろの方へ、何れも大勢にて取り囲んで連れ申す、その折り、内匠殿の申されるには、「上野介の事、此の間中、意趣（遺恨）これ有るが故に、殿中と言ひ、今日のことと言ひ、恐れ入ることなれど、是非に及ばず（抑えに抑えがたく）、打ち果たした」由の事を、大広間より柳の間溜り御廊下杉戸の外までの間に、幾度も繰返し繰返し申され、その節（刃傷があった時）の事にて、せき（急いで）申された故に、殊の外大音にてこれ有り候（ことのほか大声であった）という。

高家衆をはじめ、取り囲んで行く衆の中の一人が、「……もはや事は済んだのだから、おだまりなされ！　あまり『高き声』（大きな声）にて叫ぶのは如何なものか？」と申されたので、その後は、何も申さなくなりました。

このたびのことを後々思い出してみると、内匠殿の「心中」を察し入るに、吉良殿を討ち果たすことができなかつたことは、さぞかしご無念のことであつただろう。ほんとうに「不慮の急変」（突然の出来事）ゆえに、前後の判断もできず、右のように取り扱つたのは、「是非なく候」（しかたなく、どうしようもなく、そうするしかなかつた）のであります。とは言え、これらはことは、ただ自分個人のことにて、朋友（吉良殿）への「義」（道義）のみで、そうしたのであります。お上（幕府）に対しては、このような議論には及ばないのは当然であるが、老婆心ながらあれこれと思いめぐらすことも多いのです。

十、問題点 一

さて、この「松の廊下刃傷事件」を正確に知るためには、何よりも江戸城内の「松の廊下周辺の内部構造」と、それに直接関わつた人たちの「位置関係」などを厳密に知らなければ、何一つ問題の解決にはならない。そこで、「江戸城松の廊下」（東京都立中央図書館所蔵）の図を見本として、いわば「松の廊下刃傷事件の略図」を描いて見たので、それを参照しながら、文章を読んでもらえれば、その様子がはっきりと理解できるかと思う。

それでは、問題の「三人」（吉良と梶川と浅野）の「位置関係」をしつかりと再確認しておきたいと思うが、梶川は、「……角柱の辺りから、（遠く離れた）御白書院の方を見て見る」と、まず、手前の「大広間の方の障子際」に、まさに「勅使饗応役」の浅野内匠頭と「院使饗応役」の伊達左京の両人が居られた。一方、吉良殿は、御白書院の方よりやってくるとともに、梶川は、その「松の廊下」か（或いは「縁側の方を通過して）、吉良殿の方へと歩み寄つては、角柱から六、七間（約十〜十二メートル）のところ二人はばつたりと「出会つて」いる。そして、お互い立った状態で、「……今日の御使の刻限が早く相成り候儀を一言二言」話していたのである。（ちなみに、松の廊下は、いわゆる「大広間から白書院へと至る」字型の廊下」であり、西に十九段、北に三十一段の全長約五十段で、幅は畳四枚の「約四メートル」ほどの「畳敷きの大廊下」である。）

では、最初の「問題」として、その「一言二言」の内容というのは、一体、具体的には

どういうものだったのか？ つまり、ほんとうに「……御使の刻限が早く相成り候儀を一言二言」話していただけたのか？ もしそうであるなら、そのこと自体で、浅野殿がいきなり吉良殿に切り付ける理由はどこにもないことになる。それとも、ほかに何かを話していたのだろうか？ つまり、梶川は、「一言二言」と書いているが、実際は、例えば、「浅野殿のこと」もあれこれ話して、それが浅野殿の耳に入ったのか？ それとも、吉良殿の「表情」がニヤニヤしたり「笑え声」などが聞こえてきて、それでカッとなってしまったのか？ この辺のところは全く分からない。例えば、室鳩巢の『赤穂義人録』などによると、梶川の方へ歩いてきた吉良殿は、途中、「……高家衆の『列』に向かいて、聞こえよがしに浅野殿の悪口を言い始めた」となっているが、本当にそうなのかどうかはよく分からない。むろん、今、ここで探しているのは、まさに「最後の一押し」であり、その「最後の一押し」が、一体、何だったかということである。つまり、浅野内匠頭の「頭の中」（或いは「心の中」）では、すでに「この間の遺恨」は、まさにコップ一杯になっていて、あとは「最後の一押し」（或いは「最後の一滴」）で、コップの水は満ちあふれ落ちてしまい、まさに吉良殿に突然切り付ける「刃傷事件」は起きてしまうのである。

*

*

さて、次の「問題」は、あまりに有名な「問題」であり、それは、『梶川氏日記』では、「最初、後ろから切り付けた」と書いてあり、一方、医師の『栗原道有録』では、「最初、眉間を切り付けた」と書いてある。そのどちらが「正しいのか？」という問題である。

まず、『梶川氏日記』では、「……誰やらん吉良殿の後より『此間の遺恨覺えたるか』と聲を掛け切り付け申し候。（其の太刀音は強く聞え候へども……）、上野介殿『是れは』とて、後の方へ振り向き申され候処を又切り付けられ候故、我等の方へ向きて逃げんとせられし処を、又二太刀ほど切れ申し候、上野介殿其俣うつ向に倒れ申され候。其の時に我等内匠頭殿へ飛かゝり申し候」とある。それでは、一体、何が問題かと問えば、それは、三人の「位置関係」からして、浅野殿が吉良殿を後ろから切り付けるためには、二人のわきを通って、わざわざ吉良殿の後ろへと回り込んで切らなければならない。わざわざそんなことをするだろうか？ ふつうに考えれば、正面から切り付けるのが自然な行為である。それでは、梶川は、見間違えたのだろうか？ それもあり得ない。なぜなら、切り付けた時、大きな太刀音がしたとも書いている。つまり、「目」だけではなく、「耳」でもそれを聞いているのである。だとすれば、一体、どのようにこの「問題」を解けばよいのだろうか？ それは、次のようなことである。——つまり、突然、「此間の遺恨覺えたるか」と聲を掛けて切り付けて来た時の、その迫って来る「姿」を見た時に、吉良殿は、一瞬、我が身を本能的に守るために、つまり、本能的な「自己防衛」として、無意識のうちに、いわば「半身のような状態」になったのではないだろうか？ その結果、まさに「……後ろから切り付けるような結果になってしまった」ということである。

そして、上野介殿、「是れは」とて、後ろの方へ振り向き申され候処を、又、（眉間を）切り付けられ候故、我等（Ⅱ私）の方へ向きて逃げんとせられし処を、又、二太刀ほど切られ申し候、上野介殿其俣うつ向に倒れ申され候。その時に我等（Ⅱ私）内匠頭殿へ飛びかゝり申し候」となるのである。それは、映画やドラマなどとは違って、浅野殿を「後ろから羽交い締め」にしたのではなく、我等（Ⅱ私）の片手は内匠殿の小さき刀の鏢に當り候故、それともに（畳に）押し付けて「すくめ申し候」（押しつけて動けないようにし

た)のである。やがて、近くにいた高家衆、ならびに内匠殿同役左京殿などかけ付けられ、其外坊主どもも見及び候処(見ることのできる範囲のところ)に居合はせ候者ども、追々かけつけて取りおさへ申し候」となるのである。

十一、問題点 二

さて、浅野内匠頭は、大勢の高家衆などに取り囲まれて連れて行かれる途中、何度も何度も「吉良上野介に『遺恨』ありて、このようなことを行なった」と、「……大広間より柳の間溜り御廊下杉戸の外までの間に(略図参照)、幾度も繰返し繰返し申された」とある。つまり、連れて行かれる途中、何度も何度も「吉良上野介に遺恨があつて、このようなことを行なった」と、何度も何度も大声で叫んでいたという。それでは、なぜ、浅野内匠頭は、何度も何度も大声で叫び続けたのだろうか？ それは、この松の廊下での「刃傷事件」というのは、単なる(病的な)「乱心」などでは決してなく、それは、むしろ非常にはつきりとした、まさに「意志を持って行なった行為」であり、それは、この間の「吉良上野介への遺恨」ありて、その「遺恨」(恨み)を晴らすための行為であり、それゆえ、単なる「乱心」などとは全く違うものだ、と、大声を張り上げて、周りの人たち(例えば高家衆たち)に「訴え続けていた」ということである。——つまり、浅野内匠頭の「乱心」は、いわゆる「病氣やストレス」などによる単なる「乱心」などではなく、それは、はっきりと吉良上野介への「遺恨」(恨み)あつての「乱心」なのである。

*

*

それでは、なぜ、ひと思いに「刺し殺そう」とはしなかったのか？ それには実にいろいろなきが考えられるかと思うが、まず、考えられることは、頭の中では、「殺そう、殺そう」と思っていたとしても、からだの方がそのように動いてくれなかったのかも知れない。その理由として、一つは、気持ちばかり焦つて、想うように斬り付けることができなかったのか、それとも、もう一つは、無意識のうちに、いわば「ためらいが生じてしまった」のかも知れない。それは、なぜか？ それは、やはり、「……上野介の事、此の間中、意趣(遺恨)これ有るが故に、殿中と言ひ、今日のことと言ひ、恐れ入ることなれど、是非に及ばず(どうしようもなく)、善悪を踏み越えて、打ち果たそう」としたが、しかし、やはり、「……人を吉良を直接刺し殺すという行為そのもの」に、また、「……殿中といい、今日のことといい、あまりにも恐れ多いこと」であり、それゆえ、頭の中では「殺そう、殺そう」と思っていたとしても、からだの方がそのようには動いてくれなかった。つまり、無意識のうちに、いわば「ためらいが生じてしまった」のかも知れない。

つまり、その時、浅野内匠頭の「頭の中」(或いは「心の中」)にあつた「思い」というのは、とにかく、吉良上野介に「遺恨」(恨み)があり、その「遺恨」(恨み)を何としても晴らしたかった。とにかく、「一矢報いたかった」。その「一矢報いたかった」という「気持ち」の方がより強くて、ひと思いに「刺し殺す」という行為よりは、むしろ「一矢報いたい」という、そういう「斬りつける」という行為を無意識のうちに選んでしまった。——つまり、何が何でも「殺したい」という思いが何よりも強ければ、恐らく、ひと思いに「刺し殺していた」に違いない。そうしなかつたということは、結局、そこまでの「思い」はなかつたのかも知れない。とにかく、「一矢報いたかった」、その「一矢報いたか

った」という「気持ち」の方がより強かったからこそ、ひと思いに「刺し殺す」という行為ではなく、むしろ相手に「斬りつける」という行為になってしまったのかも知れない。——しかも、ここで、最も大事なことは、浅野内匠頭は、吉良上野介に斬りつけた時に、「この間の遺恨覚えたるか!」という「言葉」を発したという。その「意味合い」は、「…この間の遺恨(恨み)思い知ったか!」ということであり、これは、まさに相手に「一矢報いたかった」という極めてはっきりとした「意志表示」であり、逆に、若しもひと思いに「刺し殺していた」とするならば、その時の「言葉」は、むしろ、相手に向かって、「…死ね! 思い知ったか!」という「言葉」になっただけかも知れない。

むろん、浅野内匠頭は、逃げまどう吉良上野介の姿を見て、今度は本気で「殺したい」という思いに襲われたかも知れないが、しかし、そばにいた留守居番の梶川与惣兵衛に止められてしまったので、その「思い」は、果たせなかったということになるのかも知れない。ここらあたりの「心理」は、余りにも「微妙なところ」過ぎて、それゆえ、浅野内匠頭自身以外、誰にも分かりようのないところである。

十二、栗崎道有記録

さて、次は、幕府の御典医の栗崎道有の『栗崎道有記録』であるが、その「内容」の一部は、次のようなものである。

其席ヲイテカンニンナラサル事ニヤ惣シテ内匠頭ハ気ミシカナル兼而人ノ由、吉良ヲ見付テチイサ刀ヲヌキ打ニミケンヲ切ル、エボシニアタリエボシノフチマデニテ切止ル、時ニ吉良横ウツムキニナル所ヲ二ノタチニテ背ヲ切ル、是モ刀ノ寸ハミシカク其身ハ気セキ太刀サキサガリ漸々皮肉ノ間マテ長サハ六寸余モ切レル、疵アサシ、ヒタイノ疵ハ骨ニアタリ少々疵深シ、時ニ御留守居御番梶川与三兵衛ト云人兼而表向へ出ザル役柄ナレトモ其節御奥方ノ御用聞合ノ事有之右ノ席へ居合せ、二ノ太刀切り付ル所ヲ与三兵衛内匠ヲクミトムル、夫より双方押ワケ内匠ニハ大勢番人付、吉良ハ高家衆ノ部屋迄引取。(原文)

その席を措いて堪忍ならざる事にや、惣じて内匠頭は気短なる、かねて人の由。吉良を見付けて、小き刀を抜き打つに眉間を切る。烏帽子に当たり、烏帽子の縁までにて切り止まる。時に吉良横うつむきになる所を二の太刀にて背を切る。是も刀の寸は短く、其の身は気急ぎ(気持ち焦り)、太刀先下がりが、漸く「皮肉の間」(深さ「皮膚と肉の間」)まで、長さは、六寸(約十八センチ)余り切れる。疵浅し。額の疵は、骨に当たり少々疵深し。時に御留守居番与三兵衛と言ふ人、元々表向きへ出ざる役柄なれども、其の節、御奥方の御用聞き合せの事これあり、右の席に居合せ、二の太刀切り付ける所を与三兵衛、内匠を組み留むる。それより双方押し分け(二人を押し離し)、内匠には大勢番人付き、吉良は高家衆の部屋まで引き取る。

その場で切り付けなければ我慢ならないようなことなのか? 総じて内匠頭は短気である、前から(人が言うのを)聞いている。吉良を見付けて、小き刀を抜いて打つに、眉間を切り付ける。烏帽子に当たり、その烏帽子の縁まで切り止まる。その時に、吉良

横うつむきになる所を、二の太刀にて背中を切り付ける。是も刀の寸は短く、其の身は気急せき（気持ちが焦り）、太刀先下がり、漸く「皮肉の間まで」（深さ「皮膚と肉の間」まで）、長さは、六寸（約十八センチ）余り切れる。疵浅し。額の疵（約三寸）は、骨に当たり少々疵深し。（以下省略）。——まず、「……眉間に切り付け、そして、二の太刀にて背中を切り付ける」。これが栗崎道有の「記述」であるが、しかし、彼は、その現場に実際にいたわけではなく、実際にその現場にいた梶川の「記述」の方が、やはり「信憑性はより高い」と見るのが自然ではないだろうか？ それでは、なぜ、後ろから切り付けたのだらうか？ まず、確認すべきことは、吉良と梶川の二人は、立ち止まって話をしてきた。そして、突然、浅野殿が二人に接近して行った時に、背を向けていた梶川は、その姿を見ることはできなかった。一方、吉良殿は、誰かは分からなくても、誰かが自分に近づいて来るのははっきりと見えたはずである。その時に、つまり、突然、「此間の遺恨覚えてるか」と聲を上げて切り付けて来た時に、吉良殿は、一瞬、我が身を本能的に守るために、つまり、本能的な「自己防衛」として、無意識のうちに、いわば「半身のような状態」になったのではないだろうか？ その結果、まさに「……後ろから切り付けるような結果になってしまった」というのが、ここでの一つの「考え方」になるのである。

十三、多聞伝八郎覚書

さて、お目付「多聞伝八郎」という人は、いわゆる「松の廊下の刃傷事件」の時に、浅野内匠頭を直接、まさに「取り調べた」人であり、また、庭先での「切腹」の時の、最初から最後までを「副検使役」としてすべてを見届けた人でもある。それゆえ、お目付「多聞伝八郎」という人は、いわゆる「歴史的事実」を知る上では、最も重要人物の一人になり得るかと思う。——ところが、その最も重要人物の一人である、お目付「多聞伝八郎」が書いたとされる、（これも偽書という説もあるが）、その余りにも有名な『多聞伝八郎覚書』の「内容」に対しては、実に「様々な批判」等が驚くほど集中して、今日では、殆ど「信じるに足らない文献」とまで言われかねないほどの勢いである。ただし、ここで決して忘れてはならない「最も大事なこと」は、「多聞伝八郎」という人自身は、事件直後の実に生々しい「浅野内匠頭」その人を直接、自分の目で見、直接、話をして、「取り調べ」を行ない、そして、さらに、庭先での「切腹」の時の、最初から最後までをすべてを直接見届けた、まさに「生き証人」その人そのものである。それゆえ、彼が書いたとされる『多聞伝八郎覚書』というものが、実際に彼が書いたものである限りは、その内容の中に、たとえ、どれほどの「嘘や誇張や誤謬」があろうとも、彼にしか絶対に知り得ない「生き証人」ならではの「生きた言葉」（現場を直接見た言葉）に満ちているはずであり、それゆえ、たとえ、どれほどの「嘘や誇張や誤謬」があろうとも、（むろん、訂正すべきところは訂正すべきことではあるが）、偽書ではなく、本人が直接書いた「覚書」である限りは、なお「重要な文献」の一つであることに、何ら変わることはないのである。

それでは、浅野内匠頭に直接関連した「重要な部分」だけを抜き取って、考えてみたいと思うが、最初に、「……浅野内匠頭は即日切腹、一方、吉良上野介は、手向かいせず神妙、よって御咎めなし」という、そういうお上の「裁決」を聞いて、お目付「多聞伝八郎」という人は、お上の「その裁決」は、「明らかにおかしい」と言っているのである。それ

は、何か浅野内匠頭を「ひいき目」に見て、そう言っているのとは、まったく全然違う次元の話なのである。——つまり、「ひいき」というのは、一般に、個人的な「好き嫌いの感情や何らかの利害損得」などから生じて来るものであるが、一方、「この裁決は、明らかにおかしい」というのは、彼の「理的的部分」(つまり「知性や理性」の働き)そのものからであり、それは、天秤のように、まさに「公平な目」で見た時に、「お上の裁決は、明らかに間違っている」と訴えているのである。これは、彼の「絶対的な確信」であり、だからこそ、彼は、次のように申し上げるのである。

*

*

かりそめにも五万石の城主、ことに本家は本身の(身分高き)大名に御坐候。然るところ今日直ちに切腹とはあまり手軽の御仕置きに御坐候間、今日の切腹の儀は、恐れながら私ども小身の御役にても御目付仰せ付けられ候上は、上のお手抜きは申し上げず候ては不忠に付き、恐れをかへりみず申し上げ奉り候、かつ又上野介殿、たとへ神妙にいたし候とても、内匠頭五万石の大名、家名を捨て、御場所柄をも忘却仕り、刃傷に及び候ほどの恨みこれ有り候は、乱心とても上野介に越度これ有るべきやも計り難く、ただ私ども兩人にて差し懸かり、存念相糺し候ばかりの儀をあまり御取り用ひ過ぎ候ては、後日に至り浅野家は本家大名、ことに外様の事、何事ぞこれ有り候節は、公儀御手軽の御取り計らひと存じ奉り候間、内匠頭切腹の儀はなほ又大目付ならびに私ども再応(再度)礼し、日数もたち候上いかやうとも御仕置き仰せ付けらるべき候。それまでは上野介儀も慎み仰せ付けられ、なほ又再応(再度)礼の上、いよいよ神妙に相聞こへ、何の恨み受け候儀もこれ無く、全く内匠頭乱心にて刃傷に及び候筋もこれ有り候はば、御称美の御取り扱ひもこれ有るべきところ、今日に今日の御称美はあまり御手軽にて御坐候。(以下省略)

*

*

さて、右の「本文」の「意味内容」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……かりそめにも五万石の城主、ことに本家は本身(身分高き)大名、それなのに、今日直ちに切腹とは、あまりにお手軽な御処分である。今日の切腹のことは、恐れながら、私ども小身(身分低き)役人とても、御目付(監視役)仰せ付けられし以上は、上の「お手抜き」(おなざりの御処分)のことを申し上げなければ、むしろ「不忠」(職務怠慢)になるので、恐れを顧みず申し上げる」のである。また、上野介殿、いかに神妙にいたし候とても、「……内匠頭殿は、仮にも五万石の大名、その五万石の大名が、その家名を捨て、場所柄をも忘れて、刃傷に及んだほどの恨みがあつたとすれば、たとえ乱心とても上野介に何らかの越度(切り付けられるような理由)があつたやも知れず、それゆえ、よくよく調べを重ね尽くして、それでも何の恨みも受ける理由もなく、すべて内匠頭の乱心に刃傷に及んだというのであれば、それならば、御称美の御取り扱ひもこれ有るべきところ、今日に今日の御称美はあまり御手軽にて御坐候」となるのである。

例えば、浅野内匠頭の「乱心説」を唱える人たちの、その理由の一つとして、浅野内匠頭は、元々持病の「痞え」を持ち、又、勅使饗応役という重責とその度重なる心労とでその精神状態は、殆ど「総合失調症」状態に近く、自分の勝手な思い込みによる「被害妄想」意識等に取り憑かれては、前後の見境もなく刃傷に及んだのだという説である。

さて、ここで最も大事なことは、浅野内匠頭にしてみれば、自分の吉良上野介に対するこの「遺恨」(恨み)というものは、自分の勝手な思い込みなどによる「被害妄想」など

では決してなく、自分は間違いない、吉良上野介から「不当な扱い」を受けていたという、そういう「絶対的な確信」があればこそ、その家名を捨て、場所柄をも忘れて、是非に及ばず（抑えに抑えがたく）、上野介に「刃傷に及んだ」（つまり切り付けてしまった）のである。この「絶対的な確信」がなければ、恐らく、直接、吉良上野介に切り付けるようなことはでき得なかつただろう。——つまり、「……内匠殿をば、大廣間の後の方へ、何れも大勢にて取り囲み参り申し候。其の節、内匠殿申され候は『上野介の事、此の間中、意趣有此候故、殿中と申し、今日の事かたがた恐れ入り候へども、是非に及び申さず、打ち果し候』由の事を、大廣間より柳の間溜りの御廊下杉戸の外迄の内に、幾度も繰返し繰返し申され候、其の節の事にて、せき申され候故、殊の外大音にてこれ有り候」とある。

つまり、浅野内匠頭は、最初から最後まで、徹頭徹尾、一貫して、「……私は、吉良上野介に対して、個人的な恨みがあった」と徹底的に言い続けているのである。なぜ、この「言葉」を信じようとしなののか！これは、もう「魂の底からの叫び」そのものである。その本人の「言葉」（肉声）そのものを信ぜず、なぜ、事件の「核心部分」は、まさに「当事者」（つまり本人）にしか分らないと言うのに、外からあれこれ見聞きしただけの、他人が書いた様々な「文献」などを数多く読みあさっては、彼の「行為」は、単なる病的な「乱心」に過ぎないなどと言い切るのか、おかしいだろう。浅野内匠頭の「乱心」は、単なる病的な「乱心」などでは決してなく、それは、上野介へのはつきりとした「遺恨」（恨み）あつてのことであり、敢えて言えば、「意志」を持つて行なわれた「行為」なのである。ただ、それは、最初から「計画されたもの」ではなかつたので、想うようには行かなかつたということであり、しかし、潜在的にはいつそういうことが起きてもおかしくないような、そういう「心的状態」にはあつたのだろう。

さて、もう一つの「原文」は、刃傷が起きた直後、大勢の高家衆に囲まれて連れて行かれた「柳之間」という部屋において、お目付の「多聞伝八郎」などから、直接、まさに「取り調べ」を受けた、その時の場面であり、その「内容」は、次のようなものである。

其方義御場所柄不弁上野介江及刃傷候義如何之心得候哉と最初伝八郎申渡候処、内匠頭一言之申披無之 上江奉対聊之御恨無之候へ共私之遺恨有之、一己之宿意ヲ以前後忘却仕可打果と存候ニ付及刃傷候、此上如何之御咎被 仰付候とも御返答可申上筋無之候、乍去上野介を打損し候義いかにも残念ニ奉存候。（原文）

其の方義、御場所柄不弁、上野介へ刃傷及び候義、如何の心得候やと、最初、伝八郎申し渡し候処、内匠頭、一言の申し披ぎこれ無く、上へ対し奉る聊の御恨みこれ無く候へども、私の遺恨これ有り、一己の宿意を以て、前後忘却仕り、打ち果たすべくと存じ候に付き、刃傷に及び候。此の上如何の御咎め、仰せ付けられ候とも、ご返答申し上げべく筋これ無く候。去り乍ら上野介を打損し候義いかにも残念ニ存じ奉り候。

其の方（そなた）は、御場所柄も考えず、上野介への刃傷に及んだのは、どういう「心得」（考え）からかと、最初、伝八郎そう申すと、内匠頭、一言の申し披ぎ（弁解）もしないで、お上に対しては少しもお恨み申すことはなく、ただ、「私の遺恨」（個人的な恨み）

があつて、その「己」（私個人）の「宿意」（かねてから抱いていた恨み）により、前後も忘れて、打ち果たそうと思ひ、刃傷（切り付け）に及んだのである。この上は、どのような「御咎め」（〇〇処分）を仰せ付けられようと、〇〇返答（異議）申し上げるべき筋（道理）これなく、どのような処分もお受けいたします。しかしながら、上野介を打ち損じたことは、いかにも残念でなりません、と。……

例えば、「……内匠頭、一言の申し披きこれ無く」とあるが、これは、一体、どういう「心理」かと敢えて問えば、それは、例えば、「……私は、具体的にこれこれこういふうに上野介にいじめられました」とは、さすがに「言えなかつた」ということである。それを言うことは、あまりにも「武士としての恥」であり、とても他人に言えるようなことではないのである。——例えば、ある子供が学校でいじめられていても、それを先生や親などにはなかなか言えない「心理」と、基本的には「全く同じ心理」である。つまり、先生や親にそれを打ち明けることは、あまりにも「自分がみじめ」すぎて、それに耐えられない、その人の「自尊心が許さない」というようなことである。それを先生や親などに言うくらいなら、一層死んだ方がましだという、そういう「心理」に近いのである。

だからこそ、浅野内匠頭は、「……私は、吉良上野介に対して、はつきりと個人的な遺恨（恨み）はあつた」と徹頭徹尾言い続けたけれども、「……私は、具体的にこれこれこいうふうな上野介にいじめられました」とは、さすがに「言えなかつた」ということである。それは、五万石の「大名」（城主）として、あまりにもみじめすぎて、とても「言えるようなこと」ではないのである。もしそんなことを軽々と口にすれば、それこそ、末代までの「お家の恥」（もの笑いの種）になってしまうだろう。それゆえ、そんなことは、口が裂けても、死んでも言えないという、そういう「心理」になるのである。

十四、辞世の句

最後に、有名な「辞世の句」について、少し考えてみたいと思うが、この「歌」は、『多聞伝八郎覚書』の中にしか出て来ない。それゆえ、真に本人が詠んだものかどうかは、実に色々「疑問視」されているものである。若しも本人でなければ、それは、一体、誰なのか？ それは、もう「多聞伝八郎本人」か、それ以外の誰かということになる。しかも、驚くべきことに、その誰かは、実は、浮世草紙作家の「都乃錦」という人物であり、その人には、「……風さそふ 花よりも亦 我は猶 春の名残をいかにかせんと詠んだ「歌」が実際あるのである。一方、浅野内匠頭の「歌」は、「……風さそふ 花よりも猶 我はまた 春の名残をいかにかせんと詠んだ」である。これは、もう誰がどう考えても、まさに「猶」と「亦」とを入れ替えただけの、完全なる「コピー」（模写）である。だとすれば、どちらか一方が、間違いなく、まさに「コピー」（模写）をしたのであり、それでは、一体、どちらの方がかという、そういう「問題」が残るだけである。

そこで、まず、浅野内匠頭の「歌」が「本物」であり、一方、浮世草紙作家の「歌」の方が「コピー」（模写）であるとすれば、それは、あまりにも当たり前のことであり、例えば、一六八二年に、明智光秀は、謀反を起して、織田信長を「本能寺の変」で討っている。その「歴史的事実」を基にして、実に様々な「映画やドラマ或いは小説」などが生まれて来るのである。それと同じように、まず、浅野内匠頭の庭先での「切腹」という、ま

さに「歴史的事実」があり、その「歴史的事実」を基にして、実に様々な「記述」（書物等）が生み出されて来るのである。その時に、実に様々な「不純物」（嘘や誇張や誤謬など）も一緒に付き纏って来るのである。——つまり、浅野内匠頭が「辞世の句」を詠み、そして、浮世草紙作家の「都乃錦」という人が、それを「コピー」（横写）したとすれば、それは、あまりにも自然であり、まさに「自然の流れ」そのものである。

一方、若しも「浅野内匠頭」という人は、実際には「辞世の句」など詠んではいなかったとしたら、一体、どういうことになるのか？ つまり、お目付の「多聞伝八郎」という人は、自分が書いたとされる『多聞伝八郎覚書』のなかで、なぜ、詠んでもいない「辞世の句」などを詠んだような場面を、わざわざ「書き加え」たりしたのだろうか？ どうして、そんな「大うそ」を敢えて付いてまで、その「場面」を書き加えなければならなかったのか、その最大の理由は、一体、何だったのか？ そういう「問題」になるかと思うが、その「答え」は、次のようなことである。

例えば、自分の高い人の「切腹」の時には、本来、「自分の刀」で介錯してもらおうことが許されていた。また、「辞世の句」を詠むことも当然許されていた。それが「本来のあるべき姿」なのである。それなのに、どうして「浅野内匠頭」の時だけは、「自分の刀」で介錯してもらおうことも許されず、また、「辞世の句」を詠むことも許されず、さらには、まさに庭先での「切腹」などという、そのような「おざなりの処置」になったのか？ それは、明らかに間違っている。——本来であれば、自分が『多聞伝八郎覚書』の中で鮮やかに描いてみせた、まさに「辞世の句」を詠む場面のように、当然のことながら、そういうふうにするべきだったのである。と、当時の関係者たちに強く「抗議」（訴えている）のである。そして、「歌」は、浮世草紙作家の「都乃錦」という人が詠んだ「歌」を借りて来たが、しかし、それをそのまま「浅野内匠頭」の「辞世の句」とすることには、さすがに「気が引けた」のかどうか、そこで、まさに「猶」と「亦」とを入れ替えて、いかにも「浅野内匠頭」の「辞世の句」のようにしたということになるのである。

それでは、一体、どちらが、「歴史的事実」となるのか？ それは、なかなか判別し難い問題であり、どちらとも言いが、そのどちらであれ、その「歌の内容」は、いかにも「春の名残り」を惜しむような歌になっているのだろう……。

*

風さそふ 花よりも亦 我は猶 春の名残をいかにとかせん (都乃錦)

風さそふ 花よりも猶 我はまた、春の名残を いかにとかせん (浅野内匠頭)

*

ちなみに、この二つの「歌」を読み比べてみると、「浅野内匠頭」の「辞世の句」の方が、「歌」の「抑揚、リズム、流れ、響き、その他」としては、遙かに「水の流れ」のように、「自然な流れ」になっているかと思う。それゆえ、「歌」としては、後者の方が遙かに「優れている」ということになるかと思う。

*

*

では、その「本文」（内容）であるが、浅野内匠頭は、切腹の場に臨んで、「……御検使衆に一つの願ひこれ有り、拙者差料の刀（自分の刀）、御預かり置かれておられると思うが、その刀にて介錯してもらいたい、その刀は後には介錯人へ差し上げたい」と申されたので、それを大検使庄司下総守が承り、「副使の御目付衆いかが思われる」と申されるので、「願

いの通りにすべきであろう」と申したので、預りの品をすぐに取り寄せるその間、

* 内匠頭は、「……硯箱・紙を乞ひ候故、差出し候処、刀参り申し候内に、内匠頭硯箱引寄せ、ゆる／＼墨を摺り、筆を取り、……」

風さそふ 花よりも猶 我ハまた、春の名残を いかにとかせん
と書きて、刀を介錯人御徒目付「磯田武太夫」に相渡し候内に相待ち居られ候。右の歌は、御徒目付「水野左衛門」受け取り、「田村右京太夫」へ差出し候に付き、受け取り申され候うち、介錯人「磯田武太夫」古法の通り介錯いたし、切腹相済み見届けの返答これ有り、死骸等は、田村右京太夫方にて取り計ひ候ゆる、後の義は左京太夫へ申し渡し、各退散なり。……

* つまり、内匠頭が硯箱と紙とを望んだので差し出したら、そこへ「介錯の刀」が着いた。内匠頭は、硯箱を引き寄せ、ゆるゆると墨を摺り、筆を取り、そして、

風さそふ 花よりも猶 我ハまた 春の名残を いかにとやせん
と書き、刀は介錯人の磯田に渡し、(介錯を)待った。その「歌」は御徒目付の水野左衛門が受け取り、そして、田村右京太夫に差し出したので、田村右京太夫は、それを受け取った。介錯人磯田武太夫は、古式にのっとり介錯をし、御検使衆は切腹を見届けた。亡骸等は、田村右京太夫の方で処置されるので、後のことは、(左京ではなく)右京太夫へ申し渡し、それぞれ城へ帰って行ったのである。……

最後に、ここでは浅野内匠頭の「辞世の句」として読み解いてみたいと思う。

風さそふ 花よりもなほ我はまた 春の名残をいかにとかせん

さて、右の「歌」の「意味内容」であるが、それは、次のようになるかと思う。つまり、「……風を自然と誘い出す花、その(自然と誘い出された)風に吹かれて、はらはらと散ってゆく宿命の、桜の花にも、春の名残(もう少し散らずにこの世で咲いていたいという思い)もあるだろうが、それ以上に、われもまた、今、まさに散って行く宿命を前にして、春の名残(この世での想いを果すこともできずに散って行く、その無念の想い)を、いかにどうすればよいというのだろうか。……」

十五、いじめとは

例えば、さんざん「いじめられた人」が、ついに耐えきれずに、相手に反撃を加えて、何らかの「傷害事件」を起こした場合、一体、どちらが悪いのか、いじめる側が悪いのか、それとも、過剰に反応した方が悪いのか、このような問いに対して、われわれは、一体、どのように答えるのだろうか？ 一般には、「……いじめは、もちろん、よくないけれども、しかし、だからといって、相手に傷害を与えるようなことは、決して許されることではない」ということになるのだろうか。そして、いじめる側の言い分としては、自分は、何も故意にいじめているというような気持ちは、全然なくて、ただ軽い気持ちで、ちよつとからかってやろうとか、面白半分でそうしていただけなのだ、ということになるのだろうか。

しかし、いじめる側は、二重の「罪」を犯しているのである。というのも、故意に「いじめる」ということ自体が、一つの「罪」であるとともに、その「いじめ」を継続して行なうことによつて、相手に「傷害事件」を起こさせるようなところまで追い込んでしまったということが、もう一つの「罪」になるのである。つまり、相手を「犯罪者」にまでしてしまったという「罪」である。なぜなら、いじめという行為がなければ、決して起こらなかった事件だからである。

ちなみに、自分自身、何か「不正な行為」（例えば「いじめ」）などを行なっていないかどうかを認識するためには、いわゆる「言い過ぎ、やり過ぎ」の部分はないか？ 自分自身に問うてみればよいわけである。そして、確かに「言い過ぎ、やり過ぎ」の部分があったとすれば、その部分だけは、まさに「不正な行為」（例えば「いじめ」）という行為を行なっていたということになるのだろう。——すなわち、何らかの「揉め事や事件」などが生じるその「根底」（原因）には、必ずと言ってよいほど、何らかの「欲望や感情」などに振りまわされている「心的状態」があるとともに、いわゆる「言い過ぎ、やり過ぎ」という行為が、つねにともなっているものなのである。

一方、いじめられる側の人にとっては、もちろん、個人差はあるだろうが、相手からいじめられるということを、極めて深刻に受けとめてしまい、もうこのままでは生きてはいけないということまで追い込まれてしまう場合も多いのだろう。とは言え、ただ黙って、「いじめられている」こと自体、その人に問題があるのではないか、ということもあるのだろう。それでは、どうすればよいのだろうか？ 相手に果敢に立ち向かって、何らかの抵抗をすれば、それで問題は、解決するのだろうか。それとも、心身を鍛えて、いじめられないように努力をすべきなのだろうか。これは、非常に難しい問題であり、人間が二人以上集まれば、そこには何らかの「揉め事や争い」は、必ずついてまわるものであり、われわれ人間は、他人との様々な「あつれき」のなかで生きているというのが、まさに現実に置かれている状況なのかも知れない。だとすれば、われわれ人間は、何よりも自分自身を真の意味で鍛え、育てて、他人の「言動」に意味なく振りまわされないような、そういう、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した、しっかりとした一人の人間になるということが、最終的には、最も大事なことになるのかも知れない。

それはともかく、われわれ人間にとって、最も厄介な問題の一つとして、いわゆる「人間関係」というものがあるのだろう。それは、家族との「人間関係」を初めとして、近隣社会、学校、会社、友だち、その他、そこに人間が二人以上集まれば、何らかの「揉め事や争い」などが生じる可能性は、常にあるわけで、われわれ人間の「ストレス」の最大の原因の一つが、様々な「人間関係」にあることは、まったく疑いようもないものである。そして、われわれ人間は、他人との様々な「あつれき」のなかで、イライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりすることにもなるのだろう。そして、そのイライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりした思いが、何らかの形で健全に処理されていけば、問題は無いのだろうが、何か悪い形で処理されていくような場合には、実に様々な「禍わざわい」をもたらすことにもなるわけである。例えば、若い人たちが、面白くないということ、実に様々な問題を起こす場合があるが、その原因を辿れば、家庭や学校、あるいは友だち関係、その他、何らかの「人間関係」から生じている場合が多いのだろう。

また、会社で何か面白くないことがあったということで、ついつい妻に八つ当たりをしてしまい、その妻が、今度は、面白くないということで、同じように子供に八つ当たりをしてしまうというように、イライラした思いというのは、直接、相手に向かう場合と、もう一つは、次から次へと、より弱いところへと向かっていくという特徴を持っているわけである。その一つに、いわゆる「いじめ」という問題もあるのだろう。

それでは、なぜ、「いじめ」をするのだろうか？ もちろん、それにもいろいろな理由があるかと思うが、一つには、相手が、気に入らないという場合もあれば、面白いからという場合もあるのだろう。また、イライラした思いの「気晴らし」という場合もあれば、一種の優越感的なものもあるのかも知れない。その他、それが、たとえどういう理由からであれ、そこには、加害者と被害者との関係が生じ、そして、加害者は、相手より優位な立場から、権力や暴力などをふるって、ただ単にいじめるだけではなく、お金や物などを要求したり、様々なことを無理やりやらせるということも多く、一方、そうされる側の被害者は、どうしても屈辱的な思いで、深く傷つきやすいとともに、そのような屈辱的な思いを、直接、相手にぶつける場合と、もう一つは、そのイライラした思いを、今度は、他の対象に向けてぶつけ、加害者になっていくというように、次から次へと、「禍」の輪が広がっていくことにもなりかねないものである。一方、もちろん、人間関係がうまくいっていれば、それは、いわば「幸せな状態」であり、敢えて何か問題を起こす必要もないわけで、人間関係がうまくいっていないところから、実に様々な「問題や揉め事」などは、生じやすくなるということである。

そして、この問題を、さらに徹底的に考え深めていけば、最終的には「闘争本能」(或いは「権力衝動」)にまで遡ることになるかと思う。というのも、われわれ人間というのは、いつも「自分の位置」というものを知らず識らずのうちに気にしていて、それゆえ、実に様々なことで自分と他人とを比較対照し、そして、他人と同じか、あるいは少しでも他人よりも優位にあれば、それで安心したり、また、満足したりする一方、もし、他人より劣っているということになれば、決して楽しいことではなく、様々な不満や劣等感などにさいなまれることにもなり、それゆえ、少しでも他人よりも優位に立ちたいという「優越欲」(或いは「闘争心」というものが、どうしても生じて来るものである。また、いわゆる「権力」(或いは「地位」)などを持つことによって、様々な「優遇や優越感」などを得たいとともに、他人を支配し、自分の思い通りに操りたいという思い(つまり「支配欲や独占欲」など)にも襲われるものである。そして、その「権力や地位」などをかさにして、自分の言うことを聞かない人間、あるいは逆らう人間は、それを許さないという感じで、様々な罰則や制裁が加えられることにもなるわけである。つまり、このような問題を徹底的に考え深めていけば、最終的には「闘争本能」(或いは「権力衝動」)にまで遡ることになるが、それは、何かにつけて、争わずにはいられないという、「闘争本能」(或いは「競争心」)が、どうしても働くということであるとともに、他人よりも少しでも優位な立場にいたいという、いわゆる「優越欲」と、もう一つは、何らかの「権力や地位」などを得て、自分の「欲望や野心」などを現実のものにしたいという「権力衝動」などが、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、働いているということになるのだろう。

さて、話を元に戻したいと思うが、浅野内匠頭の「理知的部分」（知性や理性）は、できるだけ問題を起さず、すべてが無事に終わることをひたすら願っていたにもかかわらず、もう一方の「気概（激情）的部分」に振りまわされてしまい、結果として、刃傷事件を起こしてしまうわけである。それは、その瞬間、まさに「魔がさした」とか言いようのないものであり、その人の「理知的部分」（知性や理性）の支配よりも、その時の「気概（激情）的部分」のほうが勝つて、一気に「そういう行為」に移ってしまったということである。それでは、なぜ、もう少し我慢ができなかったのか？ もちろん、あの時、我慢ができていさえすれば、何事も起こらず、すべては無事に終わったということになるのだろう。しかし、それが、まさにわれわれ生身の人間の「かなしさ」であり、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、実に様々な「揉め事や事件」などを起こしてしまうわけである。もし、われわれ人間が、つねに「理知的部分」（知性や理性）に強く支配されて、様々な「欲望や感情」などをしっかりとコントロールできていれば、恐らく、この世の実に様々な「揉め事や事件」などは、一気に激減することになるのだろうが、決してそうならないところに、われわれ生身の人間の「現実」があるのだろう。それでは、なぜ、そうなのか？ それは、われわれ人間の「理知的部分」（知性や理性）というのは、動物から人間へと進化をして来る過程で誕生したものに過ぎないが、一方の「欲望や感情」というのは、ほかの動物にも共通した「より根源的なもの」だからである。それゆえ、いわゆる「頭」（知性や理性）では分かっていても、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、実に様々な「問題や揉め事」などを起こしてしまうわけであるが、しかし、そこにこそ、良くも悪くも、われわれ生身の人間の「現実の生」と「喜怒哀楽」というものがあるのかも知れない。

とは言え、それで、もう仕方がないのだということでもなく、やはり、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した、しっかりとした一人の人間になることが、何よりも大事なことであり、この世の実に様々な「表面的な現象」などに意味なく振りまわされ続けることにはならず、もつとその奥にある物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをより厳密にとらえられるようになることが、何よりも大事なことになるのである。というのも、真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等も厳密にでき得るようになる。そうであれば、この世の実に様々な「表面的な現象（或いは様々な言動）」などに意味なく振りまわされ続けることになるからである。それをプラトン風に言えば、一生涯、壁に映った「影」だけを見て、人生を過ごすことにもなってしまうということである。

*

*

それでは、なぜ、浅野内匠頭と上野介の間に、いわゆる「あつれき」が生じたかと言えば、一般的には上野介への「付け届け」や「饗応の予算」などが少なかつたということ、上野介が気分を害して、そのために浅野内匠頭に対して、いろいろ「いじわる」をしたのではないかと考えられているわけである。そして、浅野内匠頭が、いわゆる「松の廊下」で上野介に斬りつけた「直接の原因」としては、今までに実に様々な「原因説」が考えられているとともに、われわれは、今なお、何か「新事実」はないかと、必死にその「直接

の原因」などを執拗に探し回っているが、しかし、浅野内匠頭自身は、むしろそれを「一言も言わず、むしろ隠そうとした」というのであれば、本人が敢えて隠そうとしたものを、無理やり探し出さなくても、吉良上野介に対して、はつきりとした恨みを持ち、それは、その家名を捨て、場所柄をも忘れて、刃傷に及んだほどの「恨み」があったとすれば、それは、それでも十分であり、その「是非に及ばぬ」(抑えに抑えがたい)ほどの「遺恨」(恨み)を晴らすためにこそ、まさに「刃傷に及んだ」ということである。それゆえ、単なる病的な「乱心説」などとは、はつきりと違うものである。

一方、お互いの「相性の悪さ」というのは、一般的には、いわゆる「感覚的・生理的部分」で、どうしても好きになれないとか、また、いわゆる「感情的部分」で、うまく行かないとか、あるいは「理知的部分」では、お互いの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが、うまくかみ合わないという場合もあるのだろう。そして、浅野内匠頭の場合には、山鹿素行という人から直接、いわゆる「士道」を学んでいたということであるので、その影響を受けた「考え方」と、上野介の「考え方」とが、うまくかみ合わないということもあつたのだろう。というのも、いわゆる「饗応の予算」をどのくらいにするかということになった時に、十七歳の時に同じ「勅使饗応役」を行なった時には、およそ四百両程度で済んだとともに、その時には何事もなくすべて無事に勤めを終えることができたわけである。ところが、今度の三十五歳の時には、物価も非常に上がり、その予算は、なんと千二百両にもふくれあがっていたわけだが、その時に、真偽のほどはよく分からないが、最近の研究では、老中から、「少し予算を低めに抑えるように」という助言もあり、(むしろ、あってもなくても)、結局、浅野家では、前回の四百両と今度の千二百両の間をとって、だいたい七百両程度でよいのではないかということになったわけだが、それが、上野介にしてみれば、少なすぎる、あまりに「常識」(或いは礼儀)をわきまえていないということにもなったのだろう。

*

*

十七、添付（浅野内匠頭家来口上）

十七、添付（浅野内匠頭家来口上）

さて、この「浅野内匠頭家来口上」という書状は、元禄十五年十二月十四日の、まさにその「討ち入り」の時に、箱に入れて青竹に挟んで、吉良邸の門の前に立て置かれたものであり、その「書状」を読めば、なぜ、「赤穂浪士」たちが「吉良邸」に討ち入ったかの、その「心情」が、実に真摯に語られている「内容」であり、それゆえ、当時の赤穂浪士たちの「心情」を知る上では、この「書状」を読むだけでももう十分なものである。

では、有名な「浅野内匠頭家来口上」であるが、それは、次のようなものである。

去年三月、内匠儀、伝奏御馳走の儀に付き、吉良上野介殿へ意趣含み罷り在り候ところ、御殿中において当座逃れ難き儀御座候か、刃傷に及び候。時節、場所を弁えざる働き不調法至極に付き、切腹仰せ付けられ、領地赤穂召し上げられ候儀、家来どもまで畏れ入り存じ奉り、上使御可知を請け、城土差し上げ、家中早速離散仕り候。右喧嘩の節、御同席御抑留の御方これ在り、上野介討ち留め申さず、内匠末期残念の心底、家来ども忍び難き仕合せに御座候。高家御歴々に対し、家来ども鬱憤を挿み候段、憚りに存じ奉り候へども、君父の讐は共に天を戴かざるの儀黙止難く、今日上野介御宅へ推参仕り候、ひとへに亡主の意趣継ぎ候 志 まで御座候。私ども死後、もし御見分の御方御座候はば御披見願ひ奉り、かくのごとく御座候。以上

浅野内匠頭長矩家来

元禄十五年十二月 日

大石内蔵助 吉田忠左衛門

（以下、人名続く）

さて、その書状の「意味内容」であるが、それは、次のようなものである。

去年三月、内匠頭の儀（事であるが）、伝奏御馳走の儀（勅使饗応役のこと）に付き（おいて）、吉良上野介殿へ意趣（恨み）を含み罷り在り候（心に抱いていた）ところ、殿中において当座（その場）で逃れ難き儀（逃れ難い・やむにやまれぬことや思い）が御座候か（あつてのことか）、刃傷に及び候（及んでしまいました）。時節、場所をも弁えない（分別のない）働き（行動）、不調法至極（とんでもない不始末）に付き、切腹を仰せ付けられ、領地赤穂を召し上げられたことに、家来どもまで畏れ入っております。上使の御可知（御命令）を請け、城土差し上げ、家中早速離散仕り候。右喧嘩の節、御同席御抑留の御方これ在り、上野介討ち留め申さず、内匠末期残念の心底、家来ども忍び難き仕合せに御座候。高家御歴々に対し、家来ども鬱憤を挿み候段、憚りに存じ奉り候へども、君父の讐は共に天を戴かざるの儀黙止難く、今日上野介御宅へ推参仕り候、ひとへに亡主の意趣継ぎ候 志 まで御座候。私ども死後、もし御見聞の御方御座候はば、御披見（開いて見る事）願ひ奉り、かくのごとく御座候。以上

去年の三月、伝奏ご馳走役において、吉良上野介殿へ意趣（恨み）を抱いていたところ、殿中において何か避けがたい思いやことがあったのか、刃傷に及びました。時節や場

所をわきまえず、とんでもない不始末をしたために、切腹を仰せ付けられ、領地赤穂城を召し上げられましたことについて、家来どもまで畏れ入っております。(それはもう仕方がないことと受け止めています)。上使の命令を受け、城地を差し上げ、家中の者どもは早速に離散いたしました。この喧嘩の折り、ご同席していた方がお止めになり、上野介殿を討ち取ることができず、内匠頭の死に際しての「無念の心情」は、家来どもとして「耐え忍び難いところ」でございます。それゆえ、高家御歴々に対して、浅野の家来ども鬱憤(不満)を差し挟むなど、畏れ多いことはありませんが、「君父の讐は共に天を戴かず」(君父《君主や父》の仇とは一緒にこの世に生きていたくない)という思い、黙止(黙って捨ておく)こともできず、今日上野介殿のお宅へ推参いたしました。ただひとへに「亡主の意趣(恨み)を継ぐ志だけ」でございます。(それ以外、何もありません)。私どもの死後、もし、お検分の方がいらつしやれば、この書状をご覧いただきたく、このようにしたためた次第であります。以上

元禄十五年十二月 日 浅野内匠頭家来 大石内蔵助

例えば、殿中で事件を起こした浅野内匠頭は、いわゆる「風さそふ花よりもなほわれはまた春のなごりをいかにとやせん」という有名な「辞世の句」を遺し、(その真偽はともかく)、切腹をして無念の死を遂げる結果になってしまったわけである。それゆえ、浅野内匠頭に見れば、どうしてもまだ「死ぬに死にきれないという思い」が残っていて、それが辞世の句の中にも反映されているとみてもよいのではないかと思う。そこで、例えば、大石内蔵助がこの「辞世の句」を読めば、(もちろん、読まなくても全く同じことであるが)、例えば、「……わが主君は、死ぬに死にきれない思いを遺して死んでいった。それゆえ、主君の遺した果たせなかつた思いを果たさなければ、主君の魂は、永遠に浮かばれない。この世に未練を残したまま留まり、成仏してあの世に旅立つことができない」と思い定めたとしても、何も不思議なことではない。恐らく、大石内蔵助は、比較的早い段階から、いわゆる「主君の仇を討つ」という考え方に襲われていたに違いない。もちろん、それは、お家再興、その他、ひと通りのことは、やり尽くして、それでもなおだめな時の「最後の手段」として考えていたということである。そして、大石内蔵助に取り憑いたそのような「考え方」(仇討ち)は、如何なる苦難・如何なる困難に直面しても、一貫して変わることにはなかつたことである。なぜなら、「……主君の仇を討たなければ、主君の魂は、永遠に成仏できない」からである。それでは、誰がそれをやるのか？ それは、結局、自分がやるしかないという、そういう「決心」(覚悟)なのである。

*

*

精神の自立

精神の自立について

戦後、なぜ、このような「社会状況」になってしまったのか？ この問題を徹底して考えるためには、やはりどうしてもあの「敗戦」まで遡^{さかのぼ}らなければならない。なぜなら、この前の大戦で、われわれ日本人が「戦争」に負けたというのは、ただ単にアメリカとの「戦争」に負けたというような、そういう単純な問題では決してなく、実はわれわれ日本人が永々と受け継いできた、われわれ日本人の「精神文化」が大打撃を受けたという、そういう日本史上「一大内的事件」が起こったということである。確かに明治維新の時にも、外国の文化が日本に数多く輸入されてきたが、しかし、当時の知識人たちは、いわゆる「和魂洋才」という形で、永々と受け継がれてきた、われわれ日本人の伝統的な「精神文化」は、しっかりと受け継いで来たわけである。ところが、今度の「敗戦」という一大事件は、「和魂洋才」という、いわば「魂（精神文化）」では、むしろ西洋よりも日本人の方が優れているという大いなる自負心が、まさに「大きく傷つけられてしまった」ということである。それゆえ、敗戦後、われわれ日本人の多くは、一時的にも精神的打撃^{ショック}をその人なりに受けることになったということである。そして、今まで永々とわれわれ日本人を支えてきた「精神的バックボーン」が、まさに「大きな損傷^{ダメージ}を受け」た一方では、むしろ、戦争が終わってよかったという思いや、戦時中の「国家」のためにこそ生きるという意識へと大きく変化するとともに、われわれ日本人のなかでは、いわゆる「日本的なもの」は、どこか劣つたものとして、それらを一時的にも軽く見るような風潮にさえなってしまったということである。そして、それらに代わって、われわれ日本人は、アメリカの「文化」というものを、もろ手を上げて、無条件で、いいも悪いも、すべて受け入れてしまったということである。

もちろん、戦前の「教育」を受けた人たちは、すっかりその身に染み込んでいた日本人的な「精神文化」を、たとえ捨てたいと思っても、捨て切れなかっただろうが、しかし、戦後生まれの日本人は、いい意味でも悪い意味でも、永々と受け継がれてきたわれわれ日本人の、いわゆる伝統的な「精神文化」を、それほど（あるいはしっかりと）は受け継いではいないということである。つまり、戦後生まれの日本人は、肉体は、日本人でありながら、精神的には、すでに従来型の「日本人」ではないということである。なぜなら、いわゆる伝統的な「日本人の精神文化」を、それほど（あるいはしっかりと）は受け継いでいないからである。——つまり、われわれ人間を支えているのは、言うまでもなく、「精神」であるが、戦後生まれの日本人は、いい意味でも悪い意味でも、いわゆる伝統的な「精神的バックボーン」が、欠けているということであり、それは、言葉を換えれば、われわれ日本人が、永々と受け継いできた伝統的な「道徳観や価値観あるいは人生観」などを、それほど（あるいはしっかりと）は受け継いでいないということである。もちろん、それに代わって、戦後は、アメリカの「民主主義」という「精神文化」を受け入れたということであり、それは、言葉を換えれば、「民主主義」という可能な限り「自由」が認められた考え方の「道徳観や価値観あるいは人生観」に大きく変化したということである。

一、民主主義とは

つまり、「民主主義」という「精神文化」が、戦後、われわれ日本人の「精神的バックボーン」になっているわけだが、その「民主主義」という「精神文化」は、可能な限り、自由が認められているという「考え方」であるがゆえに、どうしても「何をやっても個人の自由だ」という「考え方」になりやすく、そのために、どこまでが善くて、どこからが悪いのか、その「境界線」(特に「道徳的・倫理的境界線」)が、ますます曖昧になっていき、最後には、もう「人が見ていなければ、あるいは人に見つからなければ、何をやっても構わない」という「考え方」に陥りやすいわけである。——すなわち、「民主主義」という「精神文化」では、ほんとうの意味で、人間としてのしつかりとした「精神的バックボーン」(特に「道徳的・倫理的バックボーン」)は、形成されにくいわけである。

例えば、道ばたに「大金」が落ちていけば、誰でも「お金」はほしいわけだから、人が見ていなければ、それを「ねこばば」したい気持ち(衝動)に襲われたとしても、それを責めることはできないだろう。ただ「問題」なのは、その「ねこばば」したいという気持ち(衝動)のままに実際に「ねこばば」をしてしまう場合と、「ねこばば」したい気持ちは、山々だけれども、それを「交番」に届け出る場合があるかと思う。そして、前者は、自分の気持ちに正直に行動したのに対して、後者は、自分の気持ちに敢えて逆らった行動をしたことになるのだろうか。それでは、なぜ、その人は、自分の気持ちに敢えて逆らった行動をしたのだろうか？ それは、他人のものを「ねこばば」するということは、人間として正しい行為ではないという「道徳観」からであるだろう。だとすれば、いわゆる「道徳」というのは、まさに「目の前に落ちているお金」は、のどから手が出るほどほしいが、だからと言って、それを「ねこばば」するわけにもいかないという、そういう、まさに「やせがまん」という「精神的行為」になるのだろうか。つまり、われわれ人間も、ほかの動物たちと同じように、本来は、心に生じて来る様々な「欲望や感情」のままに行動したいわけであるが、それに「ブレーキ」をかけているのが、まさに「道徳や倫理」であり、それゆえ、「道徳や倫理」というのは、できれば、そうしたいが、それは、人間として「正しい行為」ではないからということから、そうしないという、まさに「やせがまん」という「精神的行為」になるのだろう。

一方、「民主主義」という「精神文化」では、なかなか「やせがまん」という精神は、育ちにくいわけである。なぜなら、「民主主義」という社会は、どうしても「自由」というものを尊ぶ社会であり、それゆえ、「やせがまん」という精神とは、まさに相反するものだからである。そのため、「民主主義」という「精神文化」では、いわゆる「道徳(倫理)」というのは、極めて育ちにくい環境であるとともに、むしろ無限に「欲望」が拡大していく社会なのである。というのも、いわゆる「何をやっても、個人の自由だ」という、そういうできる限りの「自由」(好き勝手)が許されている社会であるために、法に触れなければ、何をやっても構わないという意識を育ててしまふとともに、その意識がより強まれば、もう「人が見ていなければ、あるいは人に見つからなければ、何をやっても構わない」という考え方に陥りやすく、そこには、もう「道徳も倫理」も入り込む余地はないのである。それゆえ、その「自由」という名のもとで、もうありとあらゆるそやでたためまた不正や悪徳などが堂々とまかり通り、そして、正しくまじめに生きる人間などは、「大ばか者」となり、他人より少しでも多くの欲望を貪欲にむさぼることが、最も幸せなこととして、他人に見つからなければ、どういう不正を働いても構わないという破廉恥、

不道德、放縦、無責任さが、あたり前のようになってしまふ。もちろん、表向きは、道徳や正義や正しさなどをもっともらしく言ったりはするが、しかし、心の中では、できるだけ多くの「欲望」（目先の欲や目先の快樂など）をむさぼることに限りない快感と意欲とを持って、お互い貪欲に競い合っている。そういう社会風潮の空気を吸って生活をしていれば、小さな子供からお年寄りまで、もうありとあらゆる階層の人たちが、知らず識らずのうちに、その社会風潮の空気に汚染されていく。そうなれば、各人の「精神」は、もうどのような不正や悪徳などに対しても、極めて寛大になるというよりは、むしろ無感覚になつてしまひ、それだけありとあらゆる不正や揉め事や犯罪などが、毎日のように生じてくるような、そういう全く手がつけられない社会の混乱と腐敗と墮落とを招き、やがては、その国家は、自ら滅びるか、あるいは他国によって滅ぼされることになる。たとえ滅びなくとも、その国家の混乱と腐敗と墮落は、もう目を覆うばかりになつてしまふ。

このような「民主主義」の最大の欠陥を、ソクラテスやプラトンなどは、はっきりと見抜いていた。――すなわち、この「民主主義」という「精神文化」は、われわれ人間の「内面」を骨の随まで腐らせるとともに、われわれ人間の「精神的自立」（或いは道徳的自立）をどこまでも妨げるものである、と。なるほど、「民主主義」もそれが健全に機能している間はよいだろうが、しかし、この「民主主義」というものは、遅かれ早かれ、必ず、腐敗・墮落し、そして、いわゆる「衆愚政治」（或いは「衆愚社会」）に深く陥る。なぜなら、それは、まさに「民主」だからである。つまり、「民主」というのは、本来、主権が国民にあるという意味合いであるが、その意味は、やがて、誰でもどういふ職業にも就くことができるという平等意識を育て、例えば、誰でも、政治家になれる、教育者になれる、あるいは学者にも、医者にも、芸術家にも、なれるという、それ自体は、すべての人に「機会が均等」に与えられるという意味では、よいことであるが、その一方、それにふさわしい才能なり資質のない人まで、つまり、もう誰でも、安易に、政治家、教育者、医者、芸術家、その他、何にでもなつて、あらゆる分野の「質」を本質的に落としてしまふ。その結果として、いわゆる「衆愚政治」（或いは「衆愚社会」）が現出するということである。

もちろん、「民主主義」のよさも数多くあり、それゆえ、基本的には「民主主義社会」でよいのだろうが、ただ、この「民主主義社会」というのは、いつでも「腐敗・墮落」するという危険性を内に孕んでいることを、はっきりと肝に命じておかなければならないとともに、この「民主主義」という「精神文化」だけでは、われわれ人間の精神を真の意味で「成長・成熟」させることも、また、いわゆる「精神的自立」を成し遂げることもできにくい。つまり、ほんとうの意味で、人間としてのしっかりとした「精神的背骨」といふものは、形成されにくいわけである。それでは、いつそのこと、戦前の「教育」を復活させて、われわれ日本人が永々と受け継いできた、いわゆる伝統的な「日本人の精神文化」といふものをしっかりと学ばせ、それを、われわれ日本人の「精神的背骨」とすべきなのだろうか？ もちろん、そういうことでもないのだろう。それは、各人がそれぞれ思い通りに「日本の文化」などをしっかりと身をもって学ばせ、それでよいことであり、国や社会などが、無理やり強制的に行なうべきものでもないのだろう。

二、精神の自立とは

それでは、ここで、もう一度、われわれ人間の「精神的背骨」の問題について、考えてみたいと思うが、例えば、動物の「進化の過程」で、なぜ、背骨が誕生したのかと言えば、それは、海で生活をしてきた生き物が、やがて川へと生活圏を広げていく時には、海とは環境の全く違う、いわゆる「淡水である川」で生活するためには、どうしても「背骨」というものが不可欠になったということである。――まず、古生代（デボン紀）に、様々な「天敵」（オウム貝やその他）の非常に多かった海を逃れて、初めて「淡水の川」へと生活圏を広げたのは、プラテスピスという最初の淡水魚であり、そのプラテスピスという魚は、皮膚から入る水は「甲羅やうろこ」などで防ぎ、また、えら呼吸の「えら」から入る大量の水は、いわば「腎臓を発達」させることでそれを克服し、それに加えて、「背骨」を持ったケイロレピスという魚の出現は、その「背骨」によって、力強く泳ぐことや、カルシウムなどのミネラルを内に蓄えることを可能にして、海とは環境の全く違う、いわゆる「淡水である川」でも生活できるようになったということである。

例えば、日本で生まれ育った人が、やがて、一大決心をして、アメリカやブラジルなどに移住して、そこで新しい生活をはじめた時に、その人たちの「精神的背骨」となったものは、一体、何だったかと問えば、それは、まさにその人が生まれ育った「日本」、その「日本」の風土で十分に培われた「精神」であつただろう。それが、移住した人たちの、いわゆる精神的「背骨」となっていたことは、まったく疑う余地はない。つまり、われわれ人間の精神的「背骨」となるものは、基本的には、その人の「生まれ育った環境」（それは「家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他」などの影響を非常に強く受けながら、自ずと形成されるものであるが、しかし、それは、自ずと形成されたいわば受動的な精神的「背骨」であることが多く、自らの努力によって勝ち得た真の精神的「背骨」とは、本質的に違うものである。それでは、一体、どうすれば、そのような真の精神的「背骨」というものを、しっかりと形成させることができ得るのだろうかと問えば、それは、やはり、その人が真に「内的成長（成熟）」を遂げることによってこそ、初めて可能になるということである。

つまり、その人の「生まれ育った環境」（それは「家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他」などの影響を非常に強く受けながら自ずと形成された、その人なりの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを、あらためて徹底的に「考え直して」みると、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それでは、こうなのかと、次から次へと「考え方」を新たにしていこうちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまい、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥ってしまうわけであるが、それは、言葉を換えれば、まさに根底からの「自己改革」が起こっている状態であり、そのような「心の状態」から、やがて、真に「内的成長（成熟）」を遂げることによってこそ、初めて、「自らもの」を考え、自ら判断する自由を得る」ことにもなるのである。

もちろん、その場合、徹底的に「考え直す」というのは、決して社会と対立するためのものではなく、あくまでも自分自身の「内的成長」を遂げるためのものであり、決して社会と「対立や対決」するためのものではないということである。そして、真の意味で「精神が自立する」とは、あるいは精神的「背骨」が形成されるとは、すなわち、自ら考え、

自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になる、ということがあるとともに、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。それに加えて、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行するということである。とは言え、もちろん、われわれ「生身の人間」である限りは、どうしても様々な「欲望や感情」(つまり「煩惱」)に振りまわされてしまうのも、ある程度は、仕方がないことであるとともに、そこにこそ、われわれ「生身の人間」の「哀しさ」や「喜怒哀楽」というものがあるということにもなるのだろう。

確かに、われわれ人間の精神的「背骨」となるものは、その人の「生まれ育った環境」(それは「家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他」などの影響を「大元(根、つ、こ)」としながらも、それだけでは不十分であり、それらに加えて、自らの努力によって、いわゆる「内的成長(成熟)」を遂げなければならない。——例えば、封建時代の人たちはだれもかれもが、すべてその時代(つまり「封建社会」)の「考え方」に支配されて、まったく身動きできなかつたのだらうか? もちろん、そうではないだろう。確かに、その人の「生まれ育った環境」(それは「家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他」)などの影響を非常に強く受けながらも、それらすべてに支配された「考え方」をしていたわけではなく、その人自身の「努力」によって、いわゆる「内的成長(成熟)」を真に遂げていた人たちであれば、まさに「内的自由」を得ていて、それゆえ、その時代の「考え方」の盲従から解放された、その人なりの成熟した「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが形成されていたはずである。

つまり、封建制度という社会であるがために、いわゆる外的な「自由」は、かなり制限されていたであろうが、しかし、一方、その人自身の努力の積み重ねによって、真に「内的成長(成熟)」を遂げていた人たちであれば、当然のことながら、まさに内的な「自由」を得ていたはずであり、そして、われわれ人間にとつて最も大事なことの一つは、まさに真の意味で、その「内的自由」を獲得することなのである。なぜなら、真の意味で「内的自由」を獲得することによってこそ、初めて、生まれ墜ちた「時代の束縛」から解放されるとともに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になるということだからである。——例えば、西行、兼好法師、松尾芭蕉、本居宣長、その他、そういう人たちは、みな、その人なりの「内的自由」を得ていた人たちであったことは、まったく疑う余地はないだろうと思う。

すなわち、われわれ人間の精神的「背骨」となるものは、その人の「生まれ育った環境」(それは「家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他」)などの影響を「大元(根、つ、こ)」としながらも、それだけでは不十分であり、それらに加えて、自らの努力の積み重ねによって、いわゆる真に「内的成長(成熟)」を遂げることによってこそ、真の意味での精神的「背骨」が形成されることになるわけである。そして、真に精神的「背骨」が形成されることによってこそ、その人なりの成熟した「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが、自ずと生み出されることになるということである。

三、芭蕉、西行、その他

例えば、松尾芭蕉という人は、一方では、中国の「漢詩文」などからの影響も非常に強く受けていて、それゆえ、いわゆる「蕉風」以前の「俳句」には、どうしても「漢詩文」調のものも多いわけだが、それは、本居宣長風に言えば、まさに「漢意(賢しら心)」であり、いつわりかざること多く、あるがままの物事の実なる心をとらえて、それをあるがままに表現していないということになるのだろう。やがて、古池や 蛙飛びこむ 水の音、という一句などを得る頃から、そういう「漢意(賢しら心)」から抜け出て、つまり、いつわりかざることなく、物事のあるがままの「実なる心」をとらえて、それをあるがままに語るといふ、そういう「大和心」で表現できるようになったということである。

例えば、西行の「和歌」などは、まさにそういう「歌」であり、この世の実に様々な「事物」を見聞きした時に、例えば、「桜」を見たり思ったりした時に、自分の「心」が、一体、どのように動き、どのように感じたか、そのあるがままの「実の心」を、あるがままに「歌」で的確に表現するということであり、それゆえ、西行の「歌」は、まさに西行自身の「実の心」のあるがままの表れであり、そういう意味では、あまり作為というものは、感じられないものである。また、西行自身の言葉で言えば、「心から心にものを思はせて身を苦しむるわが身なりけり」というところがあり、それは、何であれ、あれこれ「自問自答」を何度も繰り返しながら、物事を考え深めてしまう「心的状態」でもあり、そして、まさに「そこ」から、次から次へと、つまり、いわゆる「源泉」から水が湧いて出るように、まさに「心の源泉」から自ずと言葉が湧き出て、それがそのまま「歌」となって生まれ出づる、そういう感じを受ける詩人でもあるわけである。それを「音楽」で言えば、どこかモーツアルトに似た感じであり、あまり「作為」というものは、感じられず、まさに「心の源泉」から、自ずと、もう次から次へと「音(音楽)」が生まれ出づるというような、そういう「天性の音楽家」(或いは作曲家)という感じを受けるものである。

というのも、モーツアルトの場合には、父親が宮廷音楽家であったがために、乳幼児の頃から、絶えず「音(音楽)」を耳にするという恵まれた「音楽環境」と、まさに徹底した「音楽教育」を受けることとなり、そのために、乳幼児が、いわゆる「言葉」を身を以って学ぶように、まさに「音(音楽)」というものを、まるで「言葉」を身を以って学ぶように学んだ人であり、それゆえ、ふつうであれば、われわれ人間の最も深い中枢部は、いわゆる「言葉」でできているはずであるが、モーツアルトの場合には、それと同時に、その最も深い中枢部が、まさに「音」でもできていて、それゆえ、ふつう、われわれであれば、いわゆる「言葉」でものを考え、そして、「言葉」で自分の「思いや考え」を表現するところを、モーツアルトの場合には、それに加えて、まさに「音(音楽)」でものを考え、そして、まさに「音(音楽)」で、自分の「思いや考え」を表現するという、まさに「心の源泉」から、自ずともう次から次へと「音(音楽)」が生まれ出づるという、そういう感じを受ける、「天性の作曲家」ということになるのだろう。

それに比べて、松尾芭蕉の場合には、どちらかと言えば、何度も手を加えて、よりベストの状態を求めながら創り上げていくという方法であり、それは、音楽で言えば、まさにベートーヴェンに似た感じであり、これでもかこれでもかと何度も手を加えて、もうこれ以上のものはないだろうという最高の状態にまで、練りに練り上げて創り上げていくという方法であり、そこには、はっきりと「作為」というものが表れているものである。そし

て、そういう「創り方」をする作家の場合には、一つ一つの作品の「内容」の密度や完成度というものは、極めて高いものになりやすく、一方、西行やモーツァルトのような「創り方」であれば、次から次へと数多くの作品が生み出されることになるのだろう。それは、絵で言えば、ピカソなども、何らかの「着想や発見」などがあれば、それを次から次へと「絵」にしていくというタイプの画家になるかと思う。もちろん、どちらがどうということではなく、どちらも真に優れた芸術家ということになるわけである。

ところで、われわれ人間の場合、当然のことながら、言葉を使ってものを考えているわけだが、それでは、その言葉は、一体、自分の「どこ」から生まれ出てくるのか、自分でもまったく自覚できないものでありながら、なぜか自然と言葉を使ってものを考えているというのが、まさに実感ではないだろうか。それでは、なぜ、そうなるのかと言えば、もちろん、生まれながらに「普遍文法」を持ち合わせているということもあるだろうが、それとともに、それは、まさに「乳幼児」の時から、絶えず「言葉」を耳にし、それをそのままそっくり真似て、実際に言葉を使うという、そういう無限の繰り返しによってこそ、初めて、可能になるものである。——つまり、毎日、毎日、もう絶えることなく、人が話している「言葉」を耳にしているために、知らず識らずのうちに、もう実に膨大な量の「言葉」の蓄積（蓄え）ができて来るとともに、それらをそのまま実際に使って話をするという、そういう「無限の繰り返し」によってこそ、初めて、自分でもまったく自覚できない状態でありながら、なぜか自然と「音（音楽）」を使ってものを考えたようになるということである。だとすれば、「音（音楽）」の場合でも、まさに「乳幼児」の時から、絶えず「音（音楽）」を耳にし、それをそのままそっくり真似て、実際に楽器演奏や歌を歌ったりするという、そういう「無限の繰り返し」を行なえば、自分ではまったく自覚できない状態でありながら、なぜか自然と「音（音楽）」を使ってものを考えたたり、また、次から次へと自然と「音（音楽）」が生まれ出るとしても、さらに極めて微妙なところまで音を感じ分けることができ得るとしても、それほど不思議なことにはならないだろう。それが、まさにモーツァルトという人間の「天才の秘密」（その「謎解き」）になるかと思う。それは、乳幼児の時から絶えざる「音（音楽）」の「膨大な量の蓄積（蓄え）」と、それを実際に使ってみるといって絶えざる「実践」によってこそ、初めて、可能になるものであり、それは、そのほかのことについても、基本的には、まったく同じことが言えるのではないかと思う。

例えば、スポーツなどでも、幼児の頃から、文字通り、毎日、毎日、休みなく、まさに徹底した練習（努力）を無限に積み重ねていけば、その上達にはもう目を見張るものがあるとともに、いわゆる「体が覚えていく」という感じで、自分でも、なぜ、そうなるのか、まったく自覚できない状態でありながら、なぜか理想のプレーができていくということにもなるわけである。それは、将棋やそろばんなどの場合でも、まったく同じことであり、子供の頃から、毎日、毎日、休みなく、まさに徹底した練習（努力）を無限に積み重ねていくと、一般の人たちには想像もできないほどの上達を見せるということである。もちろん、たとえ同じように努力をしても、当然のことながら、個人差が生じてくるものであり、そこにこそ、まさにその人の持つて生まれた「素質や才能あるいは天分」というものが、真に問われることにもなるのだろう。

ちなみに、いわゆる「精神文化」（或いは「伝統」）の最たるものは、一体、何かと問

えば、それはもちろん、「言葉」であり、われわれ日本人であれば、まさに「日本語」を使って、お互いの「意志疎通」や「ものを考える」ということを行なっているということである。そして、言葉こそ、われわれ人間の「精神」を形づくっている最大のものであり、もし、言葉がなければ、われわれ人間は、ものを考えることも、また、生きることさえできないほどである。——つまり、言葉があればこそ、われわれ人間は、人間としての様々な活動ができるのであり、もし言葉がなければ、われわれ人間は、ほとんど人間らしい活動はでき得ないだろう。そこにあるのは、いわば本能的な（或いは動物に極めて近い）活動だけになつてしまふだろう。そして、ある人が、毎日、休みなく、頭の中や人との話のなかで使っている言葉というものは、自ずとその人の「精神」を形づくっているものであり、それゆえ、使う言葉がいかげんである、あるいは、曖昧であるとすれば、それは、その人の精神が、やはり、まだ「未熟」であると見ても、それほど大きな誤りにはならなまいだろうと思う。つまり、それだけ「言葉」と「人間」との関係は、極めて親密かつ微妙であり、どこまでも深くからみ合い、切つても切れない「不可分」な関係にあると言えるものである。

また、若い時には、とかく自分の思っていることと口から出てくる言葉とが、かなり食い違つてしまうことが多く、自分でも、「なんでこんなままずい受け応えになつてしまうのか」、あるいは「何でこんなままずい受け応えしかできないのか」と、自分でも呆れてしまうことが多いかと思う。その大きな理由の一つとしては、もちろん、話をするときにまだ十分に慣れていないからであるが、それに加えて、「言葉」が、まだ「借り物」であつて、使う言葉が、その人自身のなかで十分に消化された、いわゆる「自分の言葉」になつていないからである。つまり、自分の心と使う言葉との間には、かなりの「距離感（隔たり）」があるからである。しかし、やがて、人間として真に「成長・成熟」してくれば、次第に使う言葉との間の「距離感」もうすれ、自分の「思いや考え」などをだいたい思い通りに言葉で表現できるようになるものである。また、そうなることが、人間としての一つの大きな「成長・成熟」であるとともに、いわゆる「精神の自立」した一人の人間となるためには、どうしても必要不可欠なものになるわけである。——というのも、「言葉」というのは、できるだけ正確に、また、できるだけ厳密に使うことによつてこそ、初めて、物事をより正しく、より厳密に「判断し、評価し、認識する」ことができるようになるからである。逆に、「言葉」というものを、いかげんに、また、でたらめに使っている限りは、その人の「内的成長（成熟）」というものは、半永久的に期待できないということである。

*

*

徒然草の「最終段」

徒然草の「最終段」について

ところで、徒然草の「最終段」は、なぜ、八歳の時の想い出話になっているのか？ それが昔から一つの問題になっているそうなので、この問題についても、簡単にふれておきたいと思う。まず、その内容であるが、それは、次のようなものである。

つまり、「……八になりし年、父に問ひて言はく、『仏は如何なるものにか候ふらん』といふ。父が言はく、『仏には人のなりたるなり』と。又問ふ、『人は何として仏には成り候ふらん』と。父又、『仏の教へによりてなるなり』と答ふ。又問ふ、『教へ候ひける仏をば、なにが教へ候ひける』と。又答ふ、『それも又、さきの仏の教へによりて成り給ふなり』と。又問ふ、『その教へ始め候ひける第一の仏は、如何なる仏にか候ひける』といふ時、父、『空よりやふりけん、土よりやわきけん』といひて、笑ふ。『問ひつめられて、え答へずなり侍りつ』と、諸人に語りて興じき」（第二百四十三段）とある。

さて、兼好法師は、なぜ、このような「内容」で最後を締めくくったかと言えば、それは、恐らく、次のようなことではなかったかと思う。つまり、なぜ、自分は、「出家」をし、そして、このような『徒然草』を書くようになったのか？ そのことを自分自身に問うてみれば、その「原点」は、まさにあの「八歳の時の、あの問いかけの中」にこそ、すでにその「芽ばえ」は、あつたのだという、そういう「意味合い」を持つものである。

つまり、自分が「出家」をしたのも、何も「失恋」をしたとか、あるいは「この世の中がいやになった」からだとかいう、そういう問題では、決してなく、実を言えば、あの八歳の時に生じた「仏とは何か」という、もちろん、その時にはこれという意識などはまったくなく、ただ子供らしい無邪気な「問いかけ」に過ぎなかったものだが、しかし、今から思えば、あの「問いかけ」は、実は自分の「本質」が如実に表れたものであり、それは、何も「仏とは何か」という問いかけに限らず、例えば、人間とは何か、自分とは何か、また、人間にとって何が大事で、何がどうでもよいことなのか？ その他、そういう様々な「問いかけ」に対して、その場限りのものではなく、まさに「魂の底から納得のいくような答えが知りたい」という欲求は、例えば、食欲、性欲、物欲、金銭欲、支配欲、その他の如何なる欲求よりもむしろ強く、そのためにこそ、自分は、「出家」をして、自由の身となり、様々な「欲望や感情」などに振りまわされていた雑然とした自我から離れて、まさに百パーセント自分自身となっている「純粹自己」となつて、二十四時間、まるごと「思索活動」に耽つているうちに、まさに「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などが観えてきたというところであり、そのような感じで、「……心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつけたもの」こそは、まさに『徒然草』ということになるといふことである。

一、徒然草

そして、その『徒然草』は、兼好法師四十代の終わりぐらいまでには、すでに書き終えられていたとともに、彼自身は、その後、二十年ぐらい生きたということである。その場合、兼好法師は、書き終えた『徒然草』をもう二度と読み返すことも手を加えることもしなかったのか？ それとも、その後も、何度か読み返したり手を加えたりしていたのだら

うか？ という問題が生じるかと思うが、恐らく、兼好法師は、その後も、何度か読み返したり手を加えたりしながら、彼自身、もう「これでよいだろう」というようなところで『徒然草』のなかにこそ、彼なりに書き尽くしたというような思いがあったのではないかと思う。だからこそ、兼好法師は、『徒然草』以外、如何なる「散文」も書き残していないのであり、もし、言い残した「思いなり考えなり」が残っていたならば、恐らく、それを「文章」にしたいという衝動にかられただろうし、そのような思いで書かれた新たな「文章」も、あるいは『徒然草』のなかに自然と組み込まれて行ったかも知れない。もちろん、そういうことがあったかなかったかは、なかなか判別しがたい問題ではあるが、ただ、いわゆる『徒然草』という作品は、決してある時期までに書かれ、その後は、全く放置されたままの状態であった作品というよりは、むしろ、それなりに何度か手が加えられた結果として、兼好法師の「思いなり考えなり」が、ひと通り、書き尽くされている作品であるとともに、彼自身、もう「これでよいだろう」というようなところまで、それなりに「吟味（推敲）」されている、まさに「珠玉の作品」ということになるのではないかと思う。

二、晩年の兼好

それはともかく、兼好法師の晩年は、一つは、「和歌を詠む歌人」として活躍をし、そして、もう一つは、「歌集や古典の書写や校合」などを行なっていたそうであるが、これは、非常に興味深いものではないかと思う。というのも、われわれ人間というのは、一方では、「人間」との関わりを望み、そして、もう一方では、「孤独」になりたいという欲求があるからであり、兼好法師の場合には、まさに、一方では、「和歌を読む歌人」として、いわゆる「人間」（或いは俗世間）との関わりを持ち、そして、もう一方では、「歌集や古典の書写や校合」などを行なうことによって、そのような「人間」（或いは俗世間）との様々な関わりから生じざるを得ない「雑念とした自我」から離れて、百パーセント自分自身となっている「純粹自己」となって、自分の「内的世界」をどこまでも深めていたということである。——つまり、兼好法師は、一方では、「和歌を詠む歌人」として、自分の「世俗的な欲求」を満たし、そして、もう一方では、「歌集や古典の書写や校合」などを通して、自分の「内的世界」をどこまでも深めていたということである。

それでは、その「歌集や古典の書写や校合」などを行なうことに、一体、どういう意味があるのだろうか？ そのことについて、あらためて考えてみたいと思う。例えば、『源氏物語』の文章を一字一句丁寧に「書き写す」ことによって、一体、何を得心のかと言え、それは、絵における「模写」の場合とまったく同じ理由からであり、作品を「外から見て、理解する」だけではなく、作品をいわゆる「内から観て、理解する」という方法なのである。つまり、文章を一字一句丁寧に「書き込る」ことは、すなわち、その文章を「一字一句極めて厳密に吟味（考察）しながら、その文章の理解をどこまでも深めていく作業になる」とともに、言葉の使い方や間の取り方、あるいは言葉の組み合わせや文章の構成の仕方、さらに作者の「心情」の微妙な「動きや想い」というものを、ただ読むだけではなく、書き写すことによってこそ、どこまでも深くその世界に溶け込んで、わが身に感じて、実感としてより深く理解することができるようになるということである。

そして、兼好法師自身、いろいろな「歌集や古典」などをそのように「一字一句極めて、厳密に吟味(考察)することを行なっていた」とすれば、当然のことながら、自分自身の作品である『徒然草』に対しても、まったく同じように「一字一句極めて厳密に吟味(考察)する、ようなことを行なっていた」と見るほうが、遙かに自然であるとともに、もし、自分の心に合わない(或いは気に入らない)ような箇所があれば、そのところは、何度か手を加えるようなこともしていたに違いない。なぜなら、自分の心に合わない(或いは気に入らない)ような箇所があれば、そのところが、気になって気になってどうにも仕方がなかっただろう。それゆえ、結局は、自分の心に合うように手を加えざるを得ないのである。また、そのようなことを行なう「時間」は、兼好法師の場合には、十二分にあつたということである。

もちろん、現存している『徒然草』という作品が、果たして「兼好法師一人だけの手ですべて編集されたもの」なのか、それとも、他人の手があれこれ加わっているものなのかは、なかなか判別しがたい問題ではあるが、基本的には、以上のようなことが言えるのではないかと思う。

三、八歳の時の「想い出」

ところで、八歳の時の「想い出」話と言えば、例えば、シュリーマンは、八歳の時、父親からプレゼントされたイエツラー博士の「子供のための世界歴史」という本の中にあつた「トロヤ落城のさし絵」を見て、「お父さん、あなたは間違っていたよ、イエツラーはきつとトロヤを見たんだ。でなければ博士がここを描けなかったでしょう」と叫んだ。父親は、「ねえお前、これはただの作り絵だよ」と答えた。「それなら古代トロヤにはかつて実際にこの絵に描かれているような堅古な城壁があつたのか、との私の質問にたいしては、彼はそうだと答えた。そこで私は『お父さん、もしその城壁が立っていたことがあるのなら、それが跡方もなくなるなんてことはない。きつと数百年間の石ころや塵の下に隠れているかも知れないでしょう』と言った。そのとき彼はもちろん反対したけれども、私の考えを堅くとして動かないので、ついに私達は、私が将来いつかはトロヤを発掘するということに意見が一致した」という出来事があつたわけである。それでは、これらは、一体、どういうことを意味するのかと言えば、それは、その時、父親の答えにどうしても納得できなかったシュリーマンは、「……それじゃ、大人になったら、自分の力で必ず『トロヤ遺跡の発掘』をしてみせるぞ」と、そうはつきりと決心させることになつた「大きな出来事」の一つになつたわけである。つまり、この八歳の時の「想い出」話というのは、シュリーマンにとつては、極めて「特別な想い出」になるわけである、それと全く同じようなことが、兼好法師の場合にも言えるのではないかと思う。

つまり、兼好法師が、なぜ最終段を「自分の子供の頃の想い出話」で締めくくつたのかは、正直なところ、本人に直接聞いてみなければ、もう誰にも分からないことではあるが、ただ一般に、「自分の子供の頃をしみじみ想い出している」という心の状態というのは、多くの場合、「自分の人生を振り返っている心の状態」であることが多いとともに、実に数多くあつたであろう「子供の頃の想い出」のなかから、なぜ八歳の時のこの「想い出」を敢えて書き残しているのかと言えば、それは、やはりこの「想い出」に対しては、なにか極めて

「特別な想い」があるからであり、そして、その極めて「特別な想い」とは、まさに次のようなものではないかと思う。つまり、「……なぜ、自分は、『出家』をし、そして、このような『徒然草』を書くようになったのか？ そのことを自分自身に問うて見れば、その『原点』は、まさにあの『八歳の時の、あの問いかけの中』にこそ、すでにその『芽ばえ』はあったのだという、そういう『意味合い』を持つものである」ということである。

というのも、書き手の常として、書き手は、一体、どこに重点を置くのかと言えば、それは、やはり「冒頭の書き出し部分」と「最後の締めくくり部分」になるかと思うが、特に最後の「締めくくり部分」は、作者自身、心の底から納得のいくような内容で締めくくりたいと思うものであり、それゆえ、例えば、世間話やいいかげんな内容などでは、終われないものなのである。つまり、兼好法師が、なぜ最終段を「自分の子供の頃の想い出」話で締めくくったかと言えば、それには、極めてはっきりとした「思いや考え」があったからであり、それは、これ以外のいかなる「内容」のものでも締めくくれないという思いなのである。つまり、冒頭の「つれづれなるままに……」で始まり、そして、「八歳の時の『想い出』話」で終わっているこの『徒然草』という作品は、そのなかの内容をあれこれ入れ換えることは、でき得るとしても、いわゆる「冒頭の部分」と「最後の締めくくり部分」だけは、どうしても動かすことのできないものであり、それは、一体、なぜかと問えば、それは、冒頭の、いわゆる「つれづれなるままに……」で始まり、そして、「八歳の時の『想い出』話」で終わることによってこそ、この『徒然草』という作品は、まさに完全なる形で、「完結させる」ことができ得るからである。

それをもっと具体的に言えば、兼好法師は、最終段の前の第二四一段や第二四二段の「内容」等で、恐らく、最後を締めくくろうとしたに違いない。ところが、どうしても納得がいかず、そこで、最後の締めくくりを何にしようかと考えあぐねた末に、ふとあの「八歳の時の『想い出』」を思い出しては、その「想い出」話で終わらせることによってこそ、初めて、兼好法師は、心の底から納得のいくような「最後の締めくくり部分」が、でき得たということになるのではないかと思う。

四、最終結論

もちろん、一般的な「考え方」からすれば、この最終段は、第二三八段の「七つの自賛」という内容の流れを受けて、いわば「新たな自賛」の一つとして書かれたものということになるのかも知れない。しかし、それでは、なぜ、この八歳の時の「想い出」話というものを、敢えて最終段に持ってきたのか、その理由の説明がつかないだろう。つまり、兼好法師は、なぜ、八歳の時の「想い出」話を、敢えて最終段に持ってきたのかと言えば、それには、やはり彼なりの何らかの「はっきりとした理由」があったからに違いなく、もちろん、その理由は、当人に直接聞いてみなければ、もう誰にも分からないことではあるが、その理由の一つとして、前述のようなことが言えるのではないかということである。

つまり、兼好法師という人は、非常に文章に凝った人であり、それゆえ、最終段も、いわゆる「七つの自賛」という内容の流れを受けて、いわば「新たな自賛」の一つとして書かれたように一見、見せてはいるが、その実は、最後の締めくくり部分は、どうしても八歳の時の「想い出」話でなければならないという思いがあったということであり、そうで

なければ、最後の締めくくり部分は、ほかの何らかの内容に変わっていたはずであり、そうならないということは、結局、最後の締めくくり部分は、八歳の時の「想い出」話でよいという、最終的な決断が下ったという何よりの証拠となるものである。

また、兼好法師は、なぜ「出家」したかという理由にしても、もちろん、いろいろな「外的な理由」は、あったであろうが、しかし、最終的には、やはり「内的な理由」からであり、それは、釈迦や西行などをそうだと思うが、結局は、人間とは何か、自分とは何か、また、人間にとって何が大事で、何がどうでもよいことなのか？ その他、そういう「人間の根本的な諸問題」に対して、その場限りのものではなく、まさに「魂の底から納得のいくような答えが知りたい」という欲求は、例えば、食欲、性欲、物欲、金銭欲、支配欲、その他の如何なる欲求よりも、むしろ強く、そのためにこそ、自分は、「出家」をして、自由の身となり、様々な「欲望や感情」などに振りまわされていた雑然とした自我から離れて、まさに百パーセント自分自身となっている「純粹自己」となって、二十四時間、まるごと「思索活動」に耽るような方向を選んだということになるのである。

*

*

「参考文献」

- ※底本「古文書で読み解く忠臣蔵」(「柏書房」吉田豊・佐藤孔亮著)
- ※底本「日本古典文学全集・方丈記・徒然草・他二篇」(「小学館」)
- ※底本「古代への情熱」(「岩波文庫」シュリーマン・村田数之亮訳)
- ※ウエブ「ウイキペディア・浅野長矩」の中の「梶川日記」参照。
- ※ウエブ「忠臣蔵新聞」(刃傷事件とその背景)参照。